

# 荻窪鰯塚遺跡 荻窪東爪遺跡

荻窪地区開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



1. 萩塚籠塚道路出土遺物



2. 萩塚籠塚道路調査区全景（西より望む）

## 序

前橋市は、雄大な裾野を広げる赤城山を背に、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情にあふれた美しい県都です。

前橋市域の赤城山南麓と前橋台地上には、旧石器時代から近世、近代に至るまで、人々の生活の痕跡を示す遺跡・遺物が数多く存在します。特に古墳においては、かつて市域には800余基の存在が伝えられています。その中には大室四古墳をはじめ国指定史跡となっている古墳も9基含まれ、東国古墳文化の中心として位置づけられてきました。また、続く律令政治の時代に入ると、山王廃寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府の存在が示すおり、政治、宗教、経済の中心地として花開き一大文化圏が形成されました。さらに中世においては、戦国武将の長尾氏・上杉氏・武田氏・北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏・松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。まさに、前橋市はこれまで連綿と続いてきた歴史を物語る様々な文化財で溢れています。

今回発掘調査を実施しました荻窪塚跡、荻窪東爪跡は、前橋市の北東部で赤城山南麓の緩やかな裾野にあります。当調査団直営による発掘調査がこの地域で行われたのは今回が初めてでしたが、荻窪塚跡においては主として奈良・平安時代の集落跡、荻窪東爪跡では縄文時代前期に属する住居跡が検出され、この地区的歴史究明にとって大変貴重な資料を得ることができました。

発掘調査実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました市関係部局、地元関係者の方々、また、調査に従事されました作業員の方々に感謝とお礼を申し上げます。本報告書が市史究明の一助となることを祈念して序といたします。

平成14年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 阿部 明雄

## 例　　言

1. 本報告書は、荻窪地区開発整備事業に伴う荻窪鰐塚遺跡（おぎくばいわしづかいせき）及び荻窪東爪遺跡（おぎくぼひがしづめいせき）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
  2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
  3. 本調査は、前橋市 市長 荻原 弥悠治と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 阿部明雄との間で発掘調査委託契約を締結し実施した。
- 調査の要項は以下のとおりである。

調　　査　　場　　所　　荻窪鰐塚遺跡：前橋市荻窪町437-11

荻窪東爪遺跡：前橋市荻窪町661-1

発掘・整理担当者　小峰 篤　横澤 真一（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

発掘調査・整理期間　平成13年5月17日～平成14年3月20日

4. 本書の原稿執筆・編集は、小峰・横澤が行った。整理作業をはじめ図版等の作成には、阿部シゲ子・神澤とし江・桐谷秀子・高橋 孜・原田要三・秋元恵利子・大沢敏子・浅野艶子・田口桂子の協力があった。
5. 本発掘調査で、出土した遺物は当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。
6. 発掘調査にかかわった方々は、次のとおりである。（順不同・敬称略）  
阿部シゲ子・神澤とし江・桐谷秀子・桜井 弘・奈良岩雄・高橋 孜・原田要三・品川友伊・秋元恵利子・大沢敏子・浅野艶子・橋本 茂・市根井 勇・大沢俊夫・井上和久・大嶋洋平

## 凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図には、国土地理院発行の1/2.5万地形図（前橋・大胡・渋川・鼻毛石）を使用した。
3. 遺跡の略称は、以下のとおりである。

荻窪鰐塚遺跡：13D17

荻窪東爪遺跡：13D18

4. 検出した各遺構の略記号は、次のとおりとした。  
H…奈良・平安時代の竪穴住居跡、J…縄文時代の住居跡、B…掘立柱建物跡  
D…土坑、P…ピット
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりとした。

遺構　住居跡、掘立柱建物跡、土坑…1/60、調査区全体図…1/60、1/250

竪断面図…1/30

遺物　土器…1/3、1/4

6. 図版中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

遺構平面図・断面図　構築面…　石…

遺物実測図　施釉範囲…　須恵器断面…　墨書き…

7. 表中の数値の中で、（　）は現存値を、〔　〕は復元値を表す。

# 目 次

序	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と周辺環境	1
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	1
III 発掘調査の方針と経過	5
1 調査方針	5
2 調査経過	5
IV 層序	7
V 荻窪鰐塚遺跡	9
1 遺構概要	11
2 考察	18
VI 荻窪東爪遺跡	37
1 遺構概要	38
2 考察	38

# 図 版

- 口絵 1 荻窪鰐塚遺跡出土遺物  
2 荻窪鰐塚遺跡調査区全景

- PL. 1 荻窪鰐塚遺跡調査区全景、H-1号住居跡全景及び出土遺物  
PL. 2 H-2~8号住居跡全景、H-7号住居跡出土遺物  
PL. 3 H-8号住居跡出土遺物、H-9・10号住居跡全景、B-1~3号掘立柱建物跡全景  
PL. 4 B-4~7・9・10号掘立柱建物跡全景、B-9号掘立柱建物跡柱穴、  
荻窪鰐塚遺跡基本土層断面  
PL. 5 H-1号住居跡出土遺物  
PL. 6 H-1~3・5号住居跡出土遺物  
PL. 7 H-5・6号住居跡出土遺物  
PL. 8 H-6~8号住居跡出土遺物  
PL. 9 荻窪東爪遺跡調査区全景、J-1・2号住居跡全景、荻窪東爪遺跡基本土層断面  
PL.10 J-1号住居跡出土遺物、表採出土遺物

# 挿 図

- Fig. 1 荻窪鰐塚遺跡・荻窪東爪遺跡位置図及び周辺遺跡図 ..... 2  
Fig. 2 荻窪鰐塚遺跡・荻窪東爪遺跡調査区設定図 ..... 6

Fig. 3	荻窪觸塚遺跡基本土層	7
Fig. 4	荻窪東爪遺跡基本土層	7
Fig. 5	荻窪觸塚遺跡全体図	9
Fig. 6	H-1・2号住居跡	23
Fig. 7	H-3・4号住居跡	24
Fig. 8	H-5・6号住居跡	25
Fig. 9	H-7・8号住居跡	26
Fig. 10	H-9・10号住居跡、B-2号掘立柱建物跡	27
Fig. 11	B-1・3号掘立柱建物跡	28
Fig. 12	B-4・8号掘立柱建物跡	29
Fig. 13	B-5・6号掘立柱建物跡	30
Fig. 14	B-7号掘立柱建物跡	31
Fig. 15	B-9号掘立柱建物跡	32
Fig. 16	B-10号掘立柱建物跡	33
Fig. 17	H-1～3号住居跡出土遺物	34
Fig. 18	H-3・5・6号住居跡出土遺物	35
Fig. 19	H-7～9号住居跡出土遺物、グリッド出土遺物	36
Fig. 20	荻窪東爪遺跡全体図	37
Fig. 21	J-1・2号住居跡	40
Fig. 22	J-1号住居跡出土遺物、表探出土遺物	41

## 表

Tab. 1	周辺遺跡一覧表	3
Tab. 2	B-1号掘立柱建物跡柱穴一覧表	13
Tab. 3	B-2号掘立柱建物跡柱穴一覧表	13
Tab. 4	B-3号掘立柱建物跡柱穴一覧表	14
Tab. 5	B-4号掘立柱建物跡柱穴一覧表	14
Tab. 6	B-5号掘立柱建物跡柱穴一覧表	14
Tab. 7	B-6号掘立柱建物跡柱穴一覧表	15
Tab. 8	B-7号掘立柱建物跡柱穴一覧表	15
Tab. 9	B-8号掘立柱建物跡柱穴一覧表	16
Tab. 10	B-9号掘立柱建物跡柱穴一覧表	16
Tab. 11	B-10号掘立柱建物跡柱穴一覧表	16
Tab. 12	掘立柱建物跡一覧表	17
Tab. 13	荻窪觸塚遺跡土器觀察表	21
Tab. 14	荻窪東爪遺跡土器觀察表	39

## I 調査に至る経緯

本年度の発掘調査実施に先立ち、平成12年度中に開発区域内で試掘調査を行っている。その結果、2カ所において縄文時代の住居跡及び奈良・平安時代の集落跡が確認された。これを受け、平成13年度において本調査を実施する運びとなり、平成13年4月11日付けで前橋市長 萩原 弥惣治より荻窪地区開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会宛てに提出された。

前橋市教育委員会では直ちに、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団（以下「調査団」という。）に対し調査実施を通知し、調査団でこれを受諾した。その後、調査団と調査依頼者（前橋市）とで協議・調整を図り、両者の間において平成13年4月24日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

現地での発掘調査は、5月17日から重機を投入し開始した。なお、遺跡名称「荻窪鎬塚遺跡」・「荻窪東爪遺跡」の「鎬塚」・「東爪」は旧地籍の小字名を採用した。

## II 遺跡の立地と周辺環境

### 1 遺跡の立地

荻窪鎬塚遺跡は、前橋市街地より北東約7kmの荻窪町437-11に位置し、荻窪東爪遺跡は、さらに北東約500mの荻窪町661-1に位置する。鎬塚遺跡の東、東爪遺跡の南西には、市営荻窪清掃工場が位置する。荻窪町は、前橋市の北東端であり、東側では勢多郡大胡町と境を接している。遺跡の東方約800mのところを寺沢川が南流しており、南方約5.5kmの地点で広瀬川に合流している。また、遺跡の北約1.5kmでは群馬用水、南約1.5kmには大正用水がそれぞれ東流している。両遺跡とも、北にそびえる上毛三山の一つである赤城山によって形成された、赤城火山斜面といわれる傾斜地上にある。赤城火山斜面は、ところどころ山麓を源にする中小の河川が南流することによって形成された。舌状の台地をいくつも持っており、比高差10m前後の断崖をなしている。赤城火山斜面では、台地部は畑地・桑畠等が展開され、河川によって形成された谷地部には水田が営まれる。両遺跡周辺もこの例には漏れず、かつて鎬塚遺跡は牧草地、東爪遺跡は畑地であり、遺跡付近には桑畠やキウイ畠などが散見された。鎬塚遺跡の標高は約194mで、4%程の勾配で南に傾斜している。一方、東爪遺跡は標高約203mで、こちらも4%程南に傾斜している。

このように、どちらの遺跡も赤城火山斜面の台地上に立地し、縄文時代と奈良～平安時代の遺物が確認できたという点から、この地が古くから人々の生活に適した地であったことがうかがえる。

### 2 歴史的環境

荻窪鎬塚・東爪遺跡の立地する赤城山南麓は、旧石器時代から中・近世にかけての多くの遺跡が調査され「文化財の宝庫」と呼ばれている。

荻窪町は桂賀地区に属するが、これは前橋市編入前の桂賀村である。ここは昭和10年の県下古墳一斉調査のおりには、79基の古墳が確認されている。これは、赤城山南麓では荒砥村、粕川村に次いで



Fig. 1 荻窪解塚遺跡・荻窪東川遺跡位置図及び周辺遺跡図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	遺跡の主な時代・概要
1	萩窪跡遺跡	前橋市萩窪町	集落	奈良～平安時代の堅穴住居跡10軒・掘立柱建物跡10棟他
2	萩窪東爪遺跡	前橋市萩窪町	集落?	縄文時代前期の堅穴住居跡2軒
3	萩窪倉賜遺跡	前橋市萩窪町	集落	奈良～平安時代の堅穴住居跡29軒・掘立柱建物跡12棟他
4	ほっこし塚古墳	前橋市萩窪町	墳墓	7世紀代の円墳
5	川白田遺跡	前橋市小坂子町	集落	縄文時代前期の堅穴住居跡22軒・土坑338基他
6	小坂子城跡	前橋市小坂子町	城郭	中世の城郭
7	小坂子要害城跡	前橋市小坂子町	城郭	中世の城郭
8	小坂子油田遺跡	前橋市小坂子町	墳墓他	7世紀代の円墳3基
9	新田塚古墳	前橋市上泉町	墳墓	7世紀代の円墳、径30m、高さ4.5m
10	檜峯古墳	前橋市上泉町	墳墓	自然石使用の横穴式石室
11	檜峯遺跡	前橋市上泉町・五代町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の堅穴住居跡76軒他、第62号住居跡からは奈良三彩小壺が出土
12	五代江戸鹽敷遺跡	前橋市五代町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の堅穴住居跡54軒他
13	五代伊勢宮II遺跡	前橋市五代町	集落	縄文時代中期の堅穴住居跡5軒他、古墳時代後期以降の堅穴住居跡10軒他
14	大日塚古墳	前橋市五代町	墳墓	7世紀前半の円墳、出土品多数
15	五代檜峯遺跡	前橋市五代町	集落	古墳時代後期の堅穴住居跡2軒
16	鳥取東原遺跡	前橋市鳥取町	墓地他	近世の埋葬施設1基、土坑6基
17	鳥取福寺遺跡	前橋市鳥取町	集落他	縄文時代前期から奈良～平安時代にかけての堅穴住居跡41軒、9世紀中頃の殿舎跡遺構
18	鳥取福寺II遺跡	前橋市鳥取町	集落	奈良～平安時代の堅穴住居跡28軒、旧石器時代の細石器出土
19	芳賀北原遺跡	前橋市鳥取町	集落	古墳時代後期から奈良～平安時代の堅穴住居跡10軒
20	芳賀東部園地遺跡	前橋市鳥取町・小坂子町・五代町	集落他	縄文時代の堅穴住居跡60軒他、古墳時代から奈良～平安時代にかけての堅穴住居跡495軒・製鉄遺構5基、吉賣4基
21	芳賀西部強地溫跡	前橋市鳥取町・小神明町・五代町	墳墓他	縄文時代前期の堅穴住居跡7軒、古墳時代後期の円墳28基・方墳1基(初期群集墓)
22	芳賀北部強地溫跡	前橋市勝沢町・小坂子町・幕町	集落他	奈良～平安時代にかけての堅穴住居跡234軒・掘立柱建物跡7棟・製鐵遺構3基
23	芳賀北曲輪溫跡	前橋市勝沢町	集落他	縄文時代の堅穴住居跡25軒、7世紀代の円墳6基
24	西田遺跡	前橋市鳥取町	墳墓他	古墳時代中期の堅穴住居跡4軒、6世紀中頃の古墳5基
25	倉本遺跡	前橋市鳥取町	集落他	弥生時代中期から後後にかけての堅穴住居跡2軒
26	小神明遺跡群	前橋市勝沢町	集落他	縄文時代から奈良～平安時代にかけての堅穴住居跡9軒
27	九糸遺跡	前橋市勝沢町	集落	古墳時代後期の堅穴住居跡34軒他
28	勝沢城跡	前橋市勝沢町	城郭	中世の城郭
29	芳賀村第49号墳	前橋市勝沢町	墳墓	円墳、径18m、高さ3.3m
30	オブ家古墳	前橋市勝沢町	墳墓	6世紀後半の前方後円墳
31	巣城跡	前橋市巣町	城郭	中世の城郭
32	桂正田稻荷塚古墳	前橋市巣町	墳墓	7世紀後半の方墳
33	東公田古墳	前橋市巣町	墳墓	7世紀後半の円墳

34. 西天神遺跡 35. 横沢新羅鬼遺跡 36. 芳山遺跡 37. 宇詩遺跡 38. 琴越丁二本松溫跡 39. 横沢城跡 40. 横沢向田遺跡  
 41. 大胡町第36号墳 42. 大胡町第38号墳 43. 横沢向山遺跡 44. 大胡町第39号墳 45. 大胡町第40号墳 46. 細越甲真木遺跡  
 47. 茅木二本松遺跡 48. 横沢柴崎遺跡 49. 足輕町遺跡

の多さとなっている。しかし、このときの調査は荒砥村のように一年の日数と同じ数にしてしまったり、芳賀村のように後の調査で記載漏れの古墳が30基以上調査されたりしていることがあるので、桂萱村に関しても、古墳築造当時の実数を反映しているとは言い難く、今後記載漏れの古墳が発見される可能性は否定できない。

赤城山南麓では、昭和40年代から50年代にかけて開発に伴う発掘調査が相次いだ。その中でも芳賀団地遺跡群は、総調査面積40万m<sup>2</sup>を超え、多くの成果が得られた。芳賀東部工業団地跡は、縄文時代の竪穴住居跡60軒（前期48・中期3・後期5・不明4）、古墳4基、古墳時代から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡495軒、掘立柱建物跡195棟、製鉄遺構5基が検出された。芳賀西部団地遺跡跡では、縄文時代前期の竪穴住居跡7軒、5世紀後半から6世紀初頭にかけての初期群集墳32基が調査された。芳賀北部工業団地遺跡<sup>(2)</sup>は、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡、奈良～平安時代の竪穴住居跡234軒、製鉄遺構3基、中世の勝沢城の一部などが確認された。

本遺跡の南西1.2kmほどに、檜峯遺跡<sup>(1)</sup>が立地する。この遺跡は、古墳時代後期から奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡75軒が検出されたが、中でも注目すべきは奈良三彩小壺を出土した第62号住居跡である。この住居跡からは他にも、匙状鉄製品や「宅」と墨書きされた土師器などが出土している。檜峯遺跡から西方約1.5kmのところには、鳥取福蔵寺I・II遺跡(17・18)がある。縄文時代前期から奈良平安時代にかけての竪穴住居跡70軒以上、9世紀中頃の鍛冶精錬遺構などが確認された。そのなかで、特筆すべきは約1万3000年前に堆積した浅間板鼻黄色軽石層(As-YP)直下の関東ローム層より確認された細石刃文化石器群である。器種も細石核・細石刃・彫刻刀型石器・削器・搔器など多岐に及んでいる。他にも、荻窪東爪遺跡と同じく縄文時代前期黒浜式に属する竪穴住居跡が検出された川白田遺跡<sup>(5)</sup>、7世紀代の円墳で主体部は横穴式石室が想定される新田塚古墳<sup>(9)</sup>、中世の城郭である小坂子城跡<sup>(6)</sup>など、数多くの遺跡が付近には点在する。

以上のように、荻窪鶴塚・東爪遺跡の所在する赤城山南麓は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良～平安時代、中・近世と弥生時代以外の全時代で人々の生活・労働・葬祭などの痕跡をうかがい知ることができる。

とも東西が4m弱の方形と考えられる。南北については、竈の位置が東壁北端に近いことから、推定で約4mと考えられる。壁高29~50cm。◎竈 東壁の北寄りに設置。◎遺物 なし。◎備考 本住居跡の明確な時期については不明。

#### H-5号住居跡 (Fig. 8・18 PL. 2・6・7)

◎位置 X34~35、Y94~95グリッド ◎面積 6.48m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-87°-E ◎形状 東西にやや延びるが、不定形である。住居のほぼ中央に柱穴が検出されており、一柱式の住居と思われる。壁の上幅は崩れており明瞭ではない。長軸3.72m 短軸3.38m 壁高16~52cm。◎竈 東壁の南端に設置。◎遺物 総数603点。土師器(台付甕、壺など)が中心であるが、須恵器(甕、壺など)も出土している。特に、本住居跡内から「林」と墨書きされた土器が2点出土した。◎備考 出土遺物などから本住居跡は8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

#### H-6号住居跡 (Fig. 8・18 PL. 2・7・8)

◎位置 X33~34、Y96~98グリッド ◎面積 13.41m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-19°-W ◎形状 住居北西隅が僅かに攢乱を受けるが、ほぼ正方形を呈す。長軸4.50m 短軸4.34m 壁高35~66cm。◎竈 東壁の中央からやや南寄りに設置。◎貯蔵穴 住居南東隅に検出。◎遺物 総数1,091点。土師器(壺、台付甕など)が大半を占める。◎備考 出土遺物などから本住居跡は8世紀初頭と考えられる。

#### H-7号住居跡 (Fig. 9・19 PL. 2・8)

◎位置 X34~35、Y96~98グリッド ◎面積 13.12m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-19°-E ◎形状 住居西側で幅約1mの機械による掘削が認められ、床面が破壊されているが西壁は原形をとどめる。南北にやや延びる長方形を呈す。長軸4.75m 短軸4.16m 壁高26~52cm。◎竈 南壁の東寄りに設置。ただし、竈上部は削平され残存状況は良好でない。◎重複関係 B-7号掘立柱建物跡と重複。本造構の方が先行する。◎遺物 総数751点。土師器(甕、壺)が中心に出土。灰釉陶器も2点出土している。◎備考 出土遺物などから本住居跡は9世紀中頃と考えられる。

#### H-8号住居跡 (Fig. 9・19 PL. 2・8)

◎位置 X37~38、Y92~93グリッド ◎面積 7.10m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-17°-E ◎形状 南北にやや延びる長方形を呈す。周溝が全周し、床面が非常に堅く締まっている。長軸3.86m 短軸3.52m 壁高32~62cm。◎竈 東壁の南東隅に近い位置に設置。◎遺物 総数265点。土師器(壺、甕)須恵器壺などが出土している。◎備考 出土遺物などから本住居跡は9世紀中頃と考えられる。

#### H-9号住居跡 (Fig. 10・19 PL. 3)

◎位置 X34~35、Y89~90グリッド ◎面積 4.87m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-16°-E ◎形状 ほぼ正方形を呈す。長軸2.94m 短軸2.71m 壁高38~43cm。◎竈 東壁の南端に近い位置に設置。残存状況はあまり良好でない。◎遺物 総数134点。土師器(甕、壺など)が中心に出土している。◎備考 出土遺物などから本住居跡は9世紀中頃と考えられる。

### III 発掘調査の方針と経過

#### 1 調査方針

今回調査した二遺跡については、平成12年度に試掘調査を実施した結果、共に遺構が確認された箇所だったので、試掘でのデータを基に面での調査を行うこととなった。当該開発区域内における新設道路部分である「荻窪東爪遺跡」、同開発区域内で温水利用型健康運動施設建設予定地の「荻窪鶯塚遺跡」、調査面積は前者が90m<sup>2</sup>、後者が2,910m<sup>2</sup>である。両遺跡共に一面調査である。

調査区全域には、遺構測量のため原則として4m間隔グリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は、南北方向をY軸とし北から南にY1、Y2、Y3……と付番する。また、東西方向をX軸とし西から東へX1、X2、X3……と付番し、それぞれ北西での交点をそのグリッド名とした。

なお、二遺跡の基準点公共座標は次のとおり。

【荻窪鶯塚遺跡】基準点(X34、Y94)

第IX系 +46924.000(X) -62864.000(Y)

緯度 36°25'15".2720 経度 139°07'55".9921

【荻窪東爪遺跡】基準点(X103、Y25)

第IX系 +47200.000(X) -62588.000(Y)

緯度 36°25'24".2921 経度 139°08'06".9926

#### 2 調査経過

本調査は、依頼課である荻窪地区整備推進室との間で協議・調整を図り、平成13年4月24日付けて発掘調査委託契約を締結し、その開始に至った。

まず新設道路部分の荻窪東爪遺跡から調査を開始した。5月17日、パワーショベル1台を投入し表土掘削を実施、調査面積が狭かったこともあり一日で全面掘削が終了し、遺構確認の段階で2軒の住居跡を検出した。5月25日から遺構の掘り下げに取りかかり本格的に調査を開始した。

荻窪東爪遺跡の調査と並行して、同開発区域内の温水利用型健康運動施設に付随する駐車場予定地において遺構確認のため試掘調査を行っている。5月29日・30日の2日間をかけて、合計3本のトレンチを入れてみるも遺物の出土は皆無、遺構の確認はできなかった。

荻窪東爪遺跡の掘り下げ作業が順調に進む中、6月5日から荻窪鶯塚遺跡の表土掘削を開始した。残土の搬出作業や、途中の天候にも影響され調査区全面の掘削が終了したのは、6月19日であった。表土掘削と並行して、鋤簾かけによる遺構確認も行い住居跡と掘立柱建物跡を検出している。

その間荻窪東爪遺跡においては、平板による遺構の測量、写真撮影の順で作業を行い6月22日をもって全調査を終了した。これ以降、荻窪鶯塚遺跡に集中して作業を進めることとなった。検出した遺構は当初の予想より良好に残っており、掘り出す土量も多く、調査開始当初の作業員数では限られた期間内に調査を終えることが困難と思われた。その為、6月と9月に作業員を補充し、最も多い時期はその数15名を数えた。また、調査時は天候に恵まれ現場作業が休みになることなく進められた。

荻窪鶯塚遺跡の調査中に、2度目の試掘調査を実施した。同開発区域内のため池建設予定地である。

試掘対象面積は約9,500m<sup>2</sup>で、7月9日から11日の3日間で計7本のトレンチを入れた。その結果、16軒の竪穴住居跡を確認した。

連日の猛暑にもかかわらず、作業員の方々の協力で8月1日、竪穴住居跡の調査に一応の目途がついた。引き続き、掘立柱建物跡の柱穴掘り下げに従事する班と平板による遺構測量に従事する班の2班体制で効率を考慮しながら作業を進めた結果、8月20日には竪穴住居跡の調査を全て終了することができた。9月に入り、新たに補充した5名の戦力は大きく、柱穴の掘り下げは目を見張る進捗であった。掘立柱建物跡の調査は、柱穴のエレベーションを記録にとり、遺構平面図、写真撮影の順で進められた。その後、9月28日に高所作業車(22m)から荻窪跡塚遺跡調査区全景写真を撮影し、現地での発掘調査全行程を終了した。

なお、整理作業は前橋市三俣町所在の文化財保護課整理作業室にて平成14年1月7日から開始し、3月20日をもって終了となった。

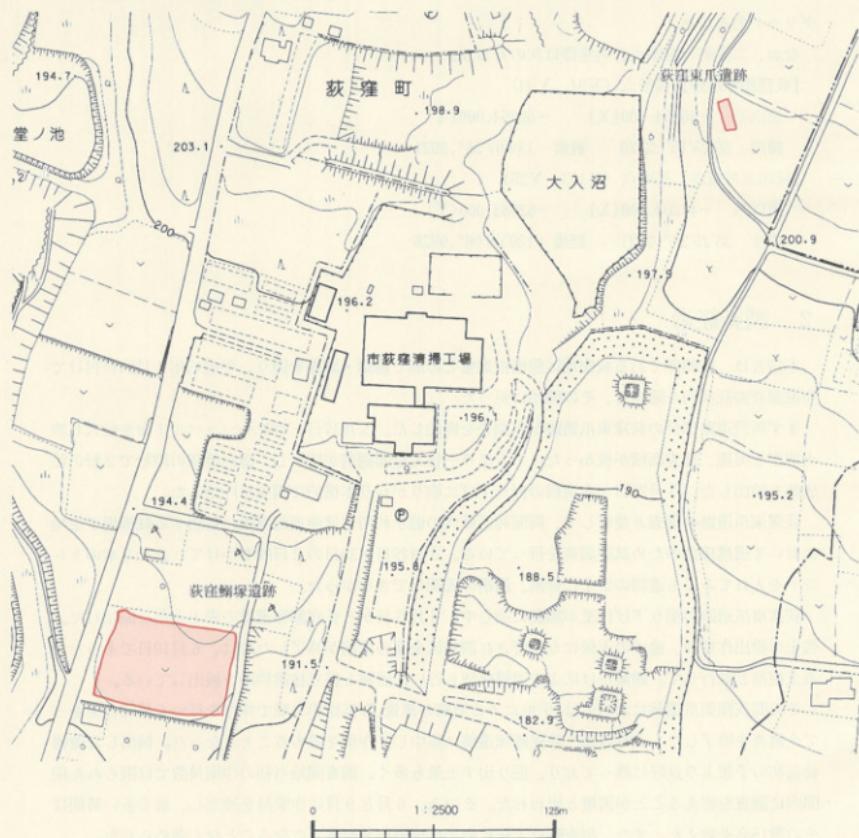


Fig. 2 荻窪跡塚遺跡・荻窪東爪遺跡調査区設定図

## IV 層 序

前橋市は、地形及び地質の特徴から区分すると大きく4つに区分することができる。第1に市北東部の赤城火山斜面、第2に市南西部のいわゆる前橋台地と呼ばれる洪積台地、第3に赤城火山斜面と前橋台地の両地域に挟まれた溝状を成す広瀬川低地帯、そして第4が現利根川氾濫原である。

今回調査した荻窪鎌塚遺跡・荻窪東爪遺跡は、市北東部で前橋市の東に位置する大胡町と接する区域にあり、先にあげた4地域の中の赤城火山斜面に属する。この赤城火山斜面は、平均勾配が2度内外という緩斜面で、地質は主として成層火砕岩類で、これを関東ローム層が覆っている。荻窪鎌塚遺跡調査区内では一部約4度の傾斜を測る箇所があるが、概ね先述したとおり2度程度の斜面である。

両遺跡の基本土層図は以下のとおりである。なお、荻窪鎌塚遺跡ではH-2号住居跡のやや南側にて、また、荻窪東爪遺跡ではJ-2号住居跡のやや北側において確認した。

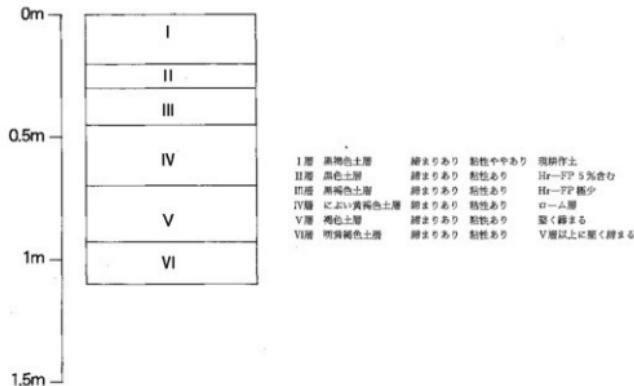


Fig. 3 荻窪鎌塚遺跡基本土層

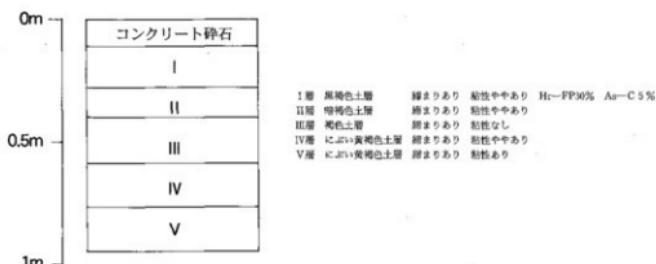


Fig. 4 荻窪東爪遺跡基本土層

# 荻窪鰯塚遺跡

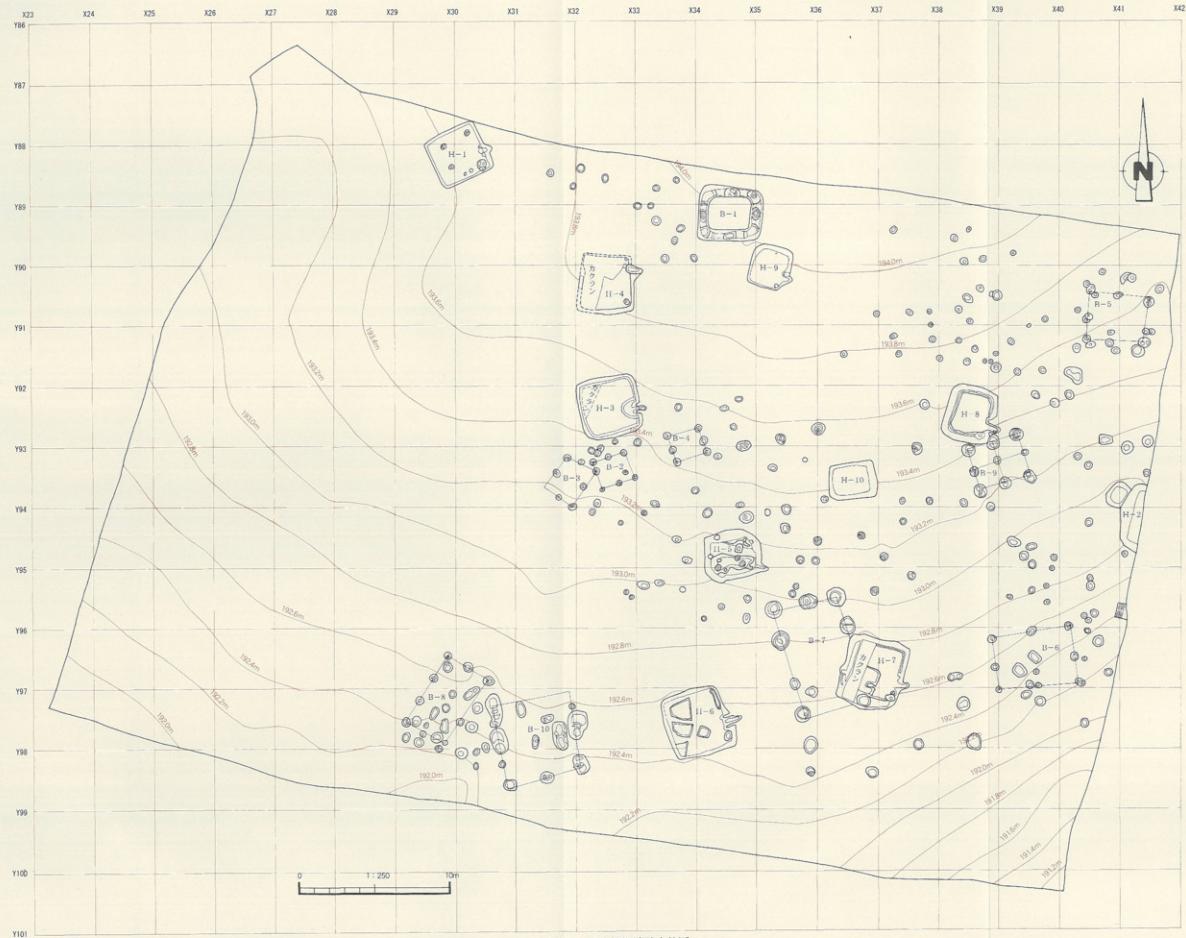


Fig. 5 荻窪解塚遺跡全体図

## 1 遺構概要

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡が10軒、掘立柱建物跡10棟である。

調査地は、赤城山南麓の緩斜面に位置する畑作地であった。元来斜面であった土地を掘削して平地に均しているため、遺構上面はやや削平されたものと思われる。地表面から遺構確認面までが浅いところでは約30cm程しかないことからもそのことが伺える。また、調査区の西側約1/3程は、後世の擾乱により遺構は確認できていない。このような状況にもかかわらず、検出した上記の遺構の残存状況は、概ね良好であったと言える。出土遺物については、土師器（甕、長胴甕、壺等）が最も多く、次いで須恵器片（甕、壺、塊等）が多く見られた。また、墨書き土器も数点あるが出土するなど、出土量だけでなく、その種類もバラエティに富んでいる。

今回の調査では縄文時代の遺構は検出できなかったが、縄文土器片が確認されている。

### (1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 6・17 PL. 1・5・6)

◎位置 X29~30、Y87~88グリッド ◎面積 10.52m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-64°-E ◎形状 ほぼ正方形を呈す。長軸3.65m 短軸3.60m 壁高17~47cm。 ◎窓 東壁のほぼ中央に設置。両袖の部分に支柱となる石が直立する。竪の天井を補強する形で長胴甕と甕が潰れた状態で出土している。 ◎貯蔵穴 住居南東隅で検出。甕が出土している。(Tab.13 荻窪塚跡土器観察表No.1の遺物) ◎遺物 総数428点。土師器が全体の9割を占める。甕、長胴甕、壺、須恵器蓋の模倣品などが出土。須恵器では、大甕の破片が出土している。 ◎備考 出土遺物などから本住居跡は7世紀後半と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig. 6・17 PL. 2・6)

◎位置 X40~41、Y93~94グリッド ◎面積 2.53m<sup>2</sup>(部分発掘) ◎長軸方位 N-16°-E ◎形状 本遺構は調査区東端での部分発掘の為、その形状は不明。南北方向が4.40m。同時期の所産と思われるH-7号住居跡及びH-8号住居跡の長軸に近い値であることから、やや南北に延びる長方形を呈するものと思われる。壁高52~75cm。 ◎遺物 総数134点。土師器片(壺など)が中心である。 ◎備考 出土遺物などから本住居跡は9世紀前半と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig. 7・17・18 PL. 2・6)

◎位置 X32~33、Y91~92グリッド ◎面積 10.38m<sup>2</sup>(推定値) ◎長軸方位 N-13°-W ◎形状 ほぼ正方形を呈す。北西隅が攢乱されているが周溝が全周する。長軸4.05m 短軸3.94m 壁高48~65cm。 ◎窓 東壁のやや南寄りに設置。 ◎遺物 総数115点。殆どが土師器片(長胴甕、壺など)である。 ◎備考 出土遺物などから本住居跡は8世紀初頭と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig. 7 PL. 2)

◎位置 X32~33、Y89~90グリッド ◎面積 10.90m<sup>2</sup>(推定値) ◎長軸方位 N-1°-E ◎形状 住居西側半分、竪北半分及び住居北側が後世の掘削等によりその殆どを破壊されている。僅かに残る西壁と東壁との間が約3.7mを測る。南東隅は不明瞭ながらも直角をなす。このことから、少なく

H—10号住居跡 (Fig.10 PL. 3)

◎位置 X36~37、Y93~94グリッド ◎面積 4.27m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N—81°—E ◎形状 東西にやや延びる長方形を呈す。長軸3.24m 短軸2.40m 壁高17~36cm。 ◎遺物 総数26点。 ◎備考 本住居跡の明確な時期については不明である。

(2) 挖立柱建物跡

B—1号掘立柱建物跡 (Fig.11 PL. 3)

◎位置 X34~35、Y88~89グリッド ◎面積 14.69m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N—88°—W ◎形状 東西4.23m (2間)、南北3.52m (2間)の長方形 (東西棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北が北より1.24m+1.32m (西辺) 1.24m+1.32m (東辺)、東西が西より1.67m+1.51m (北辺) 1.68m+1.68m (南辺) である。 ◎遺物 総数27点。土師器片が中心に出土。 ◎備考 本遺構は、当調査区内で検出された掘立柱建物跡の中で唯一、布堀りを持つものである。

Tab. 2 B—1号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番 号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	80	50	85
P 2	51	42	65
P 3	90	56	79
P 4	84	45	63
P 5	81	53	82
P 6	84	52	57
P 7	91	55	82
P 8	104	51	72

B—2号掘立柱建物跡 (Fig.10 PL. 3)

◎位置 X31~32、Y93~94グリッド ◎面積 4.12m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N—74°—E ◎形状 東西2.20m (2間)、南北1.82m (1間) の長方形 (東西棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北は1.86m (西辺) 1.80m、東西は西より1.06m+1.10m (北辺) 1.18m+1.10m (南辺) である。

Tab. 3 B—2号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番 号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	42	38	26
P 2	36	34	28
P 3	37	37	38
P 4	36	36	26
P 5	42	34	28
P 6	37	37	21

B—3号掘立柱建物跡 (Fig.11 PL. 3)

◎位置 X32、Y93グリッド ◎面積 5.80m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N—36°—E ◎形状 東西2.10m (2間)、南北2.75m (2間) の長方形 (南北棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北は北より1.32m+南西隅の

柱穴は検出できなかつたため柱間寸法は不明（西辺） $1.35m+1.58m$ （東辺）、東西は西より $1.06m+1.16m$ （北辺）南西隅の柱穴は検出できなかつたため柱間寸法は不明 $+1.11m$ （南辺）である。

Tab. 4 B—3号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	43	43	60
P 2	51	39	44
P 3	34	33	18
P 4	52	42	36
P 5	38	35	43
P 6	44	44	49
P 7	34	34	27

B—4号掘立柱建物跡 (Fig.12 PL. 4)

◎位置 X33~34、Y92~93グリッド ◎面積  $3.77m^2$  ◎長軸方位 N—72°—E ◎形状 東西  $2.14m$  (1間)、南北  $1.73m$  (2間) の長方形 (南北棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北は北より  $0.94m+0.87m$  (西辺)  $0.87m+0.85m$  (東辺)、東西は  $2.09m$  (北辺)  $2.09m$  (南辺) である。

Tab. 5 B—4号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	55	46	39
P 2	46	46	43
P 3	51	48	50
P 4	52	52	37
P 5	58	58	49
P 6	50	49	39

B—5号掘立柱建物跡 (Fig.13 PL. 4)

◎位置 X40~41、Y90~91グリッド ◎面積  $12.06m^2$  ◎長軸方位 N—87°—W ◎形状 東西  $3.84m$  (2間)、南北  $3.08m$  (2間) の長方形 (東西棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北は北より  $1.67m+1.51m$  (西辺)  $2.10m+0.87m$  (東辺)、東西は西より  $1.89m+2.13m$  (北辺)  $1.57m+2.16m$  (南辺) である。

Tab. 6 B—5号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	64	52	32
P 2	48	43	42
P 3	52	48	38
P 4	55	46	17
P 5	81	60	48
P 6	41	41	45
P 7	72	71	30
P 8	62	46	19

B-6号掘立柱建物跡 (Fig.13 PL. 4)

◎位置 X38~40、Y95~97グリッド ◎面積 19.81m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-86°-E ◎形状 東西 5.30m (2間)、南北3.71m (2間)の長方形 (東西棟) を呈す。 ◎柱間寸法 南北は北より1.90m+1.52m (西辺) 2.10m+1.77m (東辺)、東西は西より2.63m+2.63m (北辺) 2.46m+2.74m (南辺) である。

Tab. 7 B-6号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番 号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	46	44	21
P 2	47	40	25
P 3	36	35	26
P 4	38	35	42
P 5	59	52	57
P 6	53	53	36
P 7	59	54	37
P 8	64	49	40

B-7号掘立柱建物跡 (Fig.14 PL. 4)

◎位置 X35~36、Y95~97グリッド ◎面積 31.31m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-17°-W ◎形状 東西 4.24m (2間)、南北7.34m (3間) の長方形 (南北棟) を呈す。南東部分が攪乱を受けており、東辺及び南辺で各1カ所ずつ柱穴が検出できなかった。 ◎柱間寸法 南北は北より2.25m+2.90m+2.17m (西辺) 2.06m+5.15m (東辺)、東西は西より2.25m+1.87m (北辺) 4.15m ((南辺) である。 ◎遺物 総数78点。土器器片が中心である。

Tab. 8 B-7号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番 号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	122	114	110
P 2	117	114	88
P 3	76	59	64
P 4	103	103	72
P 5	93	82	49
P 6	118	97	39
P 7	124	111	59
P 8	124	96	86

B-8号掘立柱建物跡 (Fig.12 PL.)

◎位置 X29~30、Y96~98グリッド ◎面積 15.79m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-33°-E ◎形状 東西 3.70m (2間)、南北5.22m (3間) の長方形 (南北棟) を呈す。 ◎重複関係 H-7号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。 ◎柱間寸法 南北は北より1.80m+1.78m+1.68m (西辺) 3.25m+1.96m (東辺)、東西は西より1.51m+1.54m (北辺) 1.51m+1.54m (南辺) である。

Tab.9 B-8号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	46	44	42
P 2	49	46	28
P 3	50	47	58
P 4	62	53	33
P 5	49	48	54
P 6	39	36	22
P 7	60	56	35
P 8	76	60	37
P 9	66	58	59

B-9号掘立柱建物跡 (Fig.15 PL. 4)

◎位置 X38~39、Y92~93グリッド ◎面積 9.75m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-72°-E ◎形状 東西3.50m(2間)、南北2.80m(2間)の長方形(東西棟)で、総柱の建物である。 ◎柱間寸法 南北は北より1.43m+1.34m(西辺) 1.39m+1.42m(中央辺) 1.32m+1.50m(東辺)、東西は西より1.76m+1.66m(北辺) 1.75m+1.75m(中央辺) 1.75m+1.75m(南辺)である。 ◎備考 柱穴の掘方に特徴がある。P 9を除く全てにおいて、柱穴の中段までは円柱状で、それ以降底部までは半円柱状を呈す。

Tab.10 B-9号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	87	85	89
P 2	62	54	48
P 3	88	81	87
P 4	75	73	76
P 5	89	67	86
P 6	46	40	37
P 7	91	83	81
P 8	99	93	91
P 9	50	44	52

B-10号掘立柱建物跡 (Fig.16 PL. 4)

◎位置 X30~31、Y97~98グリッド ◎面積 28.81m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-9°-W ◎形状 東西5.30m(2間)、南北5.50mのほぼ正方形(南北棟)を呈す。北辺はその大半が攢乱を受け、北西隅の柱穴だけが検出されている。 ◎柱間寸法 2.69m+2.69m(西辺) 2.55m(東辺)、東西は西より2.50m+2.50m(南辺)である。

Tab.11 B-10号掘立柱建物跡柱穴一覧表

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	不明	不明	54
P 2	不明	不明	52
P 3	89	68	51
P 4	92	74	69
P 5	129	96	58
P 6	不明	不明	60

(3) グリッド等出土遺物

奈良・平安時代の土器片（土師器、須恵器、灰釉陶器など）及び繩文土器片を含め総数1,671点の遺物が出土した。この内、墨書き部」を有する土師器坏を図示した。9世紀のものとみられる。

Tab.12 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	主軸方向 棟 方向	東西m × 南北m ( 間 )	柱 間	備 考
B-1	N-88°-W E-W	4.23 × 3.52 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	布 堀
B-2	N-74°-E E-W	2.20 × 1.82 ( 2 間 ) ( 1 間 )	等 間	側 柱
B-3	N-36°-E S-N	2.10 × 2.75 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	側 柱
B-4	N-72°-E S-N	2.14 × 1.73 ( 1 間 ) ( 2 間 )	等 間	側 柱
B-5	N-87°-W E-W	3.84 × 3.08 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	側 柱
B-6	N-86°-E E-W	5.30 × 3.71 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	側 柱
B-7	N-17°-W S-N	4.24 × 7.34 ( 2 間 ) ( 3 間 )	等 間	側 柱
B-8	N-33°-E S-N	3.70 × 5.22 ( 2 間 ) ( 3 間 )	等 間	側 柱
B-9	N-72°-E E-W	3.50 × 2.80 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	總 柱
B-10	N-9°-W S-N	5.30 × 5.50 ( 2 間 ) ( 2 間 )	等 間	側 柱

## 2 考 察

今回の発掘調査の結果、堅穴住居跡が10軒及び掘立柱建物跡が10棟検出できた。調査地は、赤城山南面のなだらかな裾野に位置する畑作地であったことから若干の削平を受けており、調査区西側1／3程は、遺構が検出できなかった。しかし、残る部分から検出された遺構は、比較的残存状況が良好であったといえる。出土遺物については、土師器片（壺、甕、瓶など）が最も多く、次いで須恵器片（壺、甕、瓶など）、また、遺構は確認できていないが繩文土器片も少數であるが出土している。これらの出土遺物から、本遺跡は7世紀後半から9世紀中頃にかけての集落跡と考えられる。

### ◎堅穴住居跡

検出した住居跡は10軒である。いずれも長方形若しくは正方形に近い形状を成し、一辺が4m前後のものが多い。壁高は浅いところで16cm、深いところでは75cmを測る。竈については、2号及び10号住居跡を除いた全てにおいて東壁に設置されている。ここでは、時代の古い順に述べてみたい。

本調査区内で最も古い住居跡は、1号住居跡で7世紀後半の所産と考えられる。本遺構は調査区の北壁より最も西に位置する。柱穴は住居内の北東及び北西隅のみで検出された。貯蔵穴も南東隅にあり、甕が出土している。竈については、残存状況が検出した10軒の中でも最も良好で、竈の両袖部分に支脚となる石があり、その石を跨ぐ様に竈天井部には長胴甕と長胴の瓶が二つ組まれた形で検出された。

次に八世紀初頭と考えられる住居跡であるが、3号及び6号住居跡がこれに当たる。長軸方位は共に僅かに西に傾く。検出場所は、調査区のほぼ中央で両遺構の間隔は約17m程である。6号住居跡の方が南になる。3号住居跡は北西隅を攢乱されてはいるが、良好に残っており床面は堅緻であった。また、周溝が全週しているのもその特徴である。ただし、出土遺物の数は遺構が良好に残っていたにもかかわらず110数点を数えるのみであった。これに対し、6号住居跡では土師器片を中心に1,000点を超す。この出土遺物量の差について考えてみると、3号住居跡においては一家が別の場所に移り住んだ、つまり住居の転居が考えられる。忌むべき事由により住居を廃棄したなど転居理由は様々であろうが、転居後自然に埋没したと思われる。これに対し6号住居跡は何らか事由により急速に埋没してしまったものかと思われるが、土の埋まり具合を見ると、6号住居跡の方が緩やかであることから疑問の残るところである。

さらに時代は降り、8世紀末から9世紀初頭にかけての住居跡は、5号住居跡のみである。検出位置は調査区中央、先の3号、6号住居跡のちょうど真ん中辺りである。形状は、他のものに比べると方形を呈すとは言い難く、やや崩れた方形といった感である。住居規模も1辺が約3.5m程と少し小さめである。また、竈の設置位置もこの5号住居跡だけ明らかに南東隅に近い。この住居跡の注目点は二つある。まず一つは、住居内のはば中央に柱穴と思われる穴があり、他にそれらしき穴が無いこと。このことから、本住居跡は一柱式の建物でないかと思われること。そして、二つ目であるが、今回検出した10軒の中で唯一墨書き土器が出土している点である。墨書き土器は2点出土した。発見時は數点に割れた状態であったが、後の整理作業においてほぼ元の形に接合できた。出土した2点は、墨書きされた場所こそ異なるものの、書かれた文字はともに「林」であることが確認できた。興味深いのは、2つの墨書きの書体が異なる点である。一方は楷書で書かれており、もう一方は「林」のはらいの部分が篆書に似た特徴が見られる。また、本遺構ではなくグリッド遺物として取り上げた中に「部」の墨書き土器も見つかっている。

最後に、9世紀前半から中頃の住居跡と考えられるのが2号、7号、8号、9号住居跡である。いずれも主軸方向は16°から19°東へ傾いている。検出位置は、すべて調査区東半分にある。部分発掘となつた2号住居跡以外は、皆東壁やや南寄りに竈が設置されている。最も残存状況が良好であったのは8号住居跡で、その床面は非常に堅く綿まとめており周溝が全周している。周溝についていえば7号住居跡においても一部検出している。出土遺物の量では7号住居跡が最も多く、検出した10軒の中で本遺構のみで灰釉の高台皿が出土した。

以上の8軒については、床面直上の遺物などからその年代が特定できた。残る4号及び10号住居跡については、出土遺物が皆無若しくはほとんど無いという状況で明確な時期判定はできていない。しかし、他に検出した遺構の棟方向に着眼すると、H-5号住居跡やB-1号掘立柱建物跡のグループに属するように推定される。

#### ◎掘立柱建物跡

検出した掘立柱建物跡は、10棟である。これら10棟を棟方向の近いもので分類すると4つに分けられる。第1グループは、1号・5号掘立柱建物跡。第2グループは、2号・4号・6号・9号掘立柱建物跡。第3グループは、3号・8号掘立柱建物跡。そして第4グループが7号・10号掘立柱建物跡である。以下では、グループ毎に述べてみたい。

まず、第1グループで特筆すべき点は、1号掘立柱建物跡が布堀を持つタイプであるということである。本遺構が他の掘立柱建物跡と相違するのは、その構築技法にある。はじめに柱穴を予定する部分を掘り窪め、さらにその中に柱穴を掘るというものである。これによって、柱の根をより強固に固定するものと考えられる。このように比較的入念な技法を探る建物は、一般的な柱穴のみの掘立柱建物跡と比べて、重要度の高いものであった可能性が高く、集落の中心であったと考えるのが妥当ではなかろうか。1号掘立柱建物跡は、主柱穴で構成される「身舎」のみが検出されているが、「庇」が全周する例もある。本遺構の棟方向は、N-88°-Wで、2間2間の側柱建物である。四隅の柱穴は堀方も良く整然としている。身舎内部は、丁寧に削平され比較的堅く平坦な面を呈している。第1グループの掘立柱建物跡の時期であるが、他の遺構との重複は認められず、また出土遺物もないことから明確に判定することはできない。しかし、本調査区内で検出した住居跡で主軸方向が近似するものを同時期の遺構として捉え、一つの集落を構成すると考えるならば5号住居跡がそれに該当し、時期は8世紀末から9世紀初頭に属するものと思われる。

次に第2グループであるが、2号・4号掘立柱建物跡が非常に小型で同規模である。また、棟方向が同じく同一直線上に並び、両遺構の間隔は約3m程度で、いずれも側柱建物である。雑舎的な役割を持つものかと思われる。これに対し、9号掘立柱建物跡は総柱建物である。掘立柱建物跡は、北辺、南辺を構成する柱穴の掘方が非常に丁寧である。柱穴の中段までは円柱状に掘り込まれ、中段から底部にかけては建物内部側を半円柱状に残す形で掘り込まれる。柱をしっかりと固定する工夫と考えられる。また、本遺構は8号住居跡と重複しており、新旧関係では本遺構の方が新しい。従って、9世紀後半以降の所産と考えられる。

最後に第4グループの7号・10号掘立柱建物跡であるが、この2棟は他と比較して規模の大きさで異なっている。10号掘立柱建物跡については擾乱により全ての柱穴が検出されていないので明確なことは言及できないが、それでも東西が5.3m、南北が5.5mを測る。それに対し7号掘立柱建物跡は、南東隅で一部7号住居跡と重複しているが、北辺・南辺2間4.2m、東辺・西辺3間7.3mの側柱建物であることが確認できる。注目する点は、柱穴の大きさである。検出した8カ所の柱穴すべて形状は

梢円形を呈している。P 3 を除く 7 カ所については、短径が82cmから114cm、長径は93cmから124cm、深さでは、最も深いP 1 で110cmを測る。柱穴断面は、ロート型を成すものが多い。堀方も整然としていて良好である。このことから、柱として使用されていた木材も柱穴に見合うものが使われたと考えられ、規模の大きい建物が存在していたと思われる。時期的には、7号住居跡との重複関係を考慮すると、本遺構の方が新しいと考えられ、9世紀中頃以降の遺構と思われる。

本遺跡で検出された遺構を検証した結果、7世紀後半から9世紀にかけてのおよそ200年の間、人々の生活が営まれ続けてきたことが明らかとなった。また、布堀を持つ掘立柱建物跡や比較的大規模な掘立柱建物跡などが検出されていることから、当遺跡周辺地域にて形成されていた集落の中でも、その中心的な部分ではなかったかと想定される。今回の調査では3,000m<sup>2</sup>にも満たない調査面積であり集落の全体像を掴むまでは至っていない。今後、同地域での発掘調査が進み前橋市北東部における古代の歴史究明が進むことを期するものである。

Tab.13 萩窓跡塚遺跡土器觀察表

番号	出土位置	器 形	大 き さ		胎土	焼成	色 滅	残 存	器形の特徴・成形・調整技法	備 考	Fig
			口径	器高							
1	H-1	甕	[24.0]	34.3	細粒	良好	にぼい粒	4 / 5	肩部に最大径を持つ。体部は右から左斜め方向に裏削り。口縁部裏削りから外縁気味に立ち上がり横擦で。内面は撫で。	貯蔵穴より出土	17
2	H-1	長 脚 甕	22.0	35.9	中粒	良好	にぼい粒	3 / 4	脚部の張りは極く短縮化の傾向が見られる。底部は底盤部やや削り。外反し用指頭調整でされる。体部は僅若しくは左から右斜め方向にかけて裏削り。内面は、口縁部のみ横擦で。	竪天井井の補強として用いられたと思われる	17
3	H-1	甕	22.1	34.4	中粒	良好	にぼい粒	5 / 6	脚部の張りは非常に無い。口縁部はやや強く外反し削り。内面は、口縁部横擦で、その他は撫で。指頭調整も見られる。	竪天井井の補強として用いられたと思われる	17
4	H-1	甕	—	—	細粒	良好	灰白	口縁から肩部にかけて1/8	肩部外面に縱方向のタタキ痕有り。内面は、口縁部横擦で、底部には青苔状波紋が施される。		17
5	H-1	坏	[12.0]	—	細粒	良好	明赤褐	1 / 8	須者部着模微坏。丸底で外縁を有する。口縁部は強く横擦されやや外縁気味である。体部裏削り。内面は撫で。		17
6	H-1	坏	[13.4]	—	細粒	良好	にぼい赤褐	1 / 3	丸底で器高は低い。口縁部は僅かに内縁気味に立ち上がり横擦でされる。体部裏削り。内面は撫で。		17
7	H-1	坏	11.5	—	中粒	良好	にぼい褐	1 / 3	丸底で器高は低い。口縁部は強く横擦されほぼ直立する。体部は円周方向に裏削り。内面は撫で。		17
8	H-1	坏	11.1	3.9	細粒	良好	橙	ほぼ完形	須者部着模微坏。僅かであるが外縁が見てとれる。体部は級及び円周方向に裏削り。口縁部僅かに外縁気味に立ち上がり横擦で。内面は撫で。指頭調整有り。		17
9	H-2	坏	[12.8]	2.5	中粒	良好	明赤褐	1 / 5	平底の傾向が顯著であるが完全ではない。口縁部先端で僅かに内凹する。体部はほぼ直線的に外傾する。外内面ともに横擦で。		17
10	H-2	坏	—	—	細粒	良好	灰	口縁欠損	横擦成形。底部は回転余切り後未調整。体部下位にやや張りを待ち腹やかに外薄する。		17
11	H-3	長 脚 甕	[22.0]	—	中粒	良好	にぼい粒	口縁部 1 / 5	口縁部は強く外反し開き内外面ともに横擦で。体部は左から右斜め方向に裏削り。		17
12	H-3	坏	[18.9]	—	細粒	良好	橙	1 / 4	丸底を呈す。口縁部外側に開き横擦で。体部裏削り。内面は横擦で。		17
13	H-3	坏	[13.1]	4.2	中粒	良好	にぼい褐	1 / 3	丸底で口縁部が強く内側し、「C」字状を呈す。口縁部横擦で、体部は円周方向に裏削り。内面は撫で。		17
14	H-3	坏	[12.0]	3.8	中粒	良好	橙	2 / 3	丸底で口縁部が強く内側し横擦で。体部裏削り。内面は撫で。		17
15	H-5	坏	13.1	4.1	細粒	良好	灰褐	ほぼ完形	横擦成形。底部は回転余切り後未調整。体部下位にやや張りを待ち内縁気味に立ち上がり、口縁部先端が僅かに外縁気味に開く。		18
16	H-5	台 付 甕	11.2	—	中粒	良好	赤	口縁部のみ	最大径は頸部上位に有り。口縁部は「コ」字が崩れた様を呈し先端は僅かに外傾し直線的に立ち上がる。内面は、口縁部が横擦で。		18
17	H-5	台 付 甕	—	—	粗粒	良好	橙	底部及び脚上半分のみ	体部裏削り。脚部は横擦で。		18
18	H-5	坏	15.2	4.6	細粒	良好	明赤褐	3 / 4	完全な平底ではないが平底傾向が強い。体部中位まで外傾し上から直立し口縁部が外反する。底部及び体部下位～中位にかけて内周方向に裏削り。口縁部横擦で。内面はヘラガキ。		18
19	H-5	坏	12.8	4.2	細粒	良好	明赤褐	4 / 5	横擦成形。底部は回転余切り後未調整。体部中位にやや張りを待ち口縁部が僅かに外傾する。底部外面には「林」の墨書きが見られる。	墨書き土器	18

番号	出土位置	器 形	大きさ				胎土	焼成	色 製	残 存	触形の特徴・成形・調整技法	備 考	Fig
			口径	高さ	幅	厚							
20	H-5	坏	13.5	4.1	中粒	良好	灰	ほぼ完形	触體成形。底部は回転糸切り後周辺部のみ回転調整。体部外観から底部にかかる範囲に「カ」字形「林」の墨書きあり。No.19のものとは書体がやや異なる。	墨書き土器	18		
21	H-6	坏	14.4	5.0	細粒	良好	にぶい橙	4 / 5	丸底で口縁部は僅かに内湾する。体部は全体的に削り、口縁部削痕で。内面は無で。指頭調整有り。		18		
22	H-6	坏	[13.5]	—	中粒	良好	橙	1 / 3	丸底で口縁部は「C」字状に内湾する。体部削痕り、口縁部削痕で。内面は無で。		18		
23	H-6	坏	[12.6]	4.3	中粒	良好	赤褐色	1 / 4	丸底で口縁先端までは徑直線的に外傾する。口縁部の腹肉は薄い。体部削痕り、口縁部削痕で。内面は削で。		18		
24	H-6	長 脚 壱	[22.2]	—	中粒	良好	明赤褐色	口縁部 1 / 5	口縁部は強く外反し水平に近い形で開く。体部は斜め方向に削り、口縁部削痕で。		18		
25	H-6	台 付 壱	[10.2] (6.6)	6.6	中粒	良好	暗赤褐色	口縁部から体部にかけて 1 / 3	触部中位に最大径を持つ。口縁部は「コ」字状を呈し削痕で。体部は横方向に削り、内面は口縁部削痕で。		18		
26	H-6	台 付 壱	—	(5.9)	中粒	良好	赤褐色	脚部のみ	体部削痕り。脚部は内外面ともに横窓で。No.25と一体を成すものと思われる。		18		
27	H-7	汎用高台	—	—	細粒	良好	灰	底部を中心 に2 / 3	触體成形。底部は回転糸切り後回転調整。高台は低く「八字」状を見し後付け。底部は削毛剥りで、施釉範囲は90%程度を占める。内面には重ね焼き痕が見られる。		19		
28	H-7	壹	[21.0]	—	細粒	良好	にぶい橙	口縁部 1 / 3	口縁は「コ」字状を成すがやや崩れた様を呈す。体部に「V」字状削痕を持つ。横窓が全体的に見られる。口縁部削痕で。内面は無で。指頭調整有り。		19		
29	H-7	壇	14.5	5.6	細粒	良好	黄灰	4 / 5	触體成形。底部は回転糸切り後未調整。高径は小さく高台も低い。体部中位までは僅かに内湾気味に立ち上がるが、上位から口縁部にかけて強く外反する。		19		
30	H-7	壹	[20.6]	—	中粒	良好	赤	口縁部 1 / 3	「コ」字状口縁であるが、やや崩れた様を呈す。体部は横方向に削り、口縁部削痕で指頭調整が見られる。内面無。		19		
31	H-7	坏	12.2	3.7	中粒	良好	にぶい橙	3 / 4	ほぼ平底を呈す。口縁先端まで直線的に外傾する。体部削痕り、口縁部削痕で。内面は無で。		19		
32	H-8	坏	13.6	3.5	細粒	良好	灰褐色	ほぼ完形	触體成形。底部は回転糸切り後未調整。口縁先端がやや内湾気味に立ち上がる。		19		
33	H-8	坏	12.3	3.5	中粒	良好	黄灰	完形	触體成形。底部は回転糸切り後未調整。口縁先端までほぼ直線的に外傾する。底径はNo.32と比べてやや小形である。		19		
34	H-8	壹	[19.4]	—	細粒	良好	橙	口縁部 1 / 3	口縁が「コ」字状を呈す。口縁部は内外面ともに横窓で。		19		
35	H-9	壹	[20.5]	—	細粒	良好	赤褐色	口縁部 1 / 2	口縁部は僅かに「コ」字状を呈す。体部横方向に削り、口縁部削痕で。内面は無で。		19		
36	H-9	坏	11.5	3.4	細粒	良好	灰白	1 / 4	触體成形。底部は回転糸切り後未調整。器高は低く口縁先端まではほぼ直線的に外傾する。		19		
37	X32・Y90	坏	12.3	3.2	細粒	良好	にぶい橙	3 / 4	ほぼ平底を呈す。口縁部は僅かに内湾気味に立ち上げる横窓で。体部削痕り。内面は無で。指頭調整有り。底部外観の中央に「部」の墨書きが見られる。	墨書き土器	19		

注) 表の記載は、以下の基準で行った。

① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な氣物が入る場合には氣物名を記載した。

② 焼成は、椎眞、良好、不良の三段階。

③ 色面は、土器外面で観察し、色名は『新版標準土色図』に掲げた。

④ 大きさの単位はcmであり、現存値を（ ）、復元値を [ ] で示した。

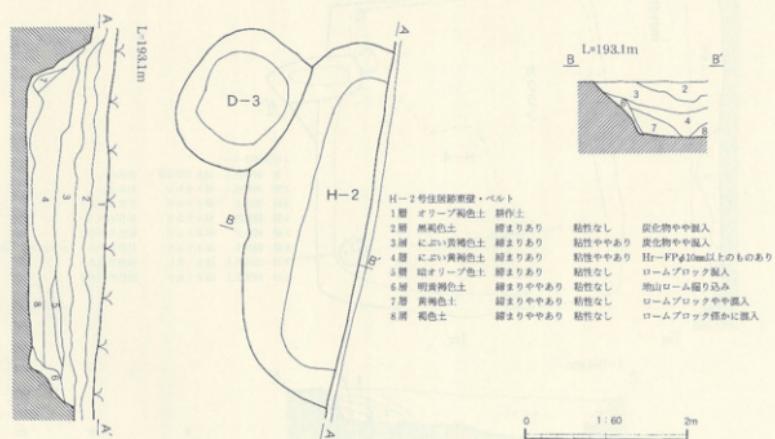
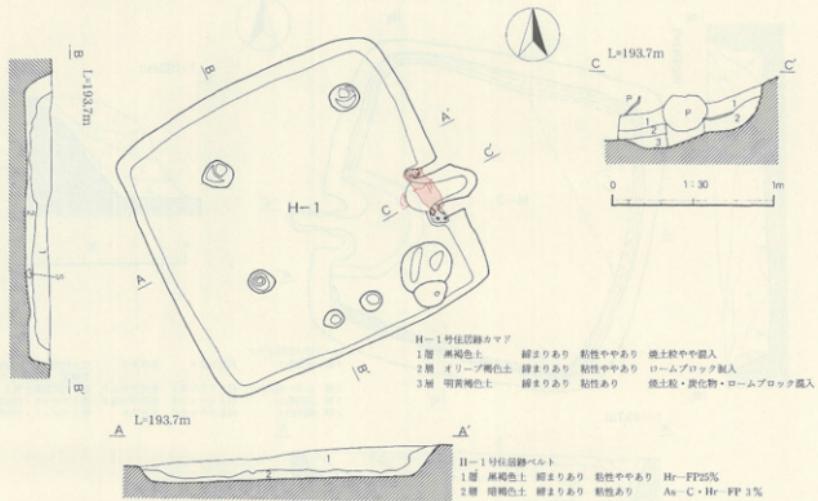


Fig. 6 H-1・2住居跡

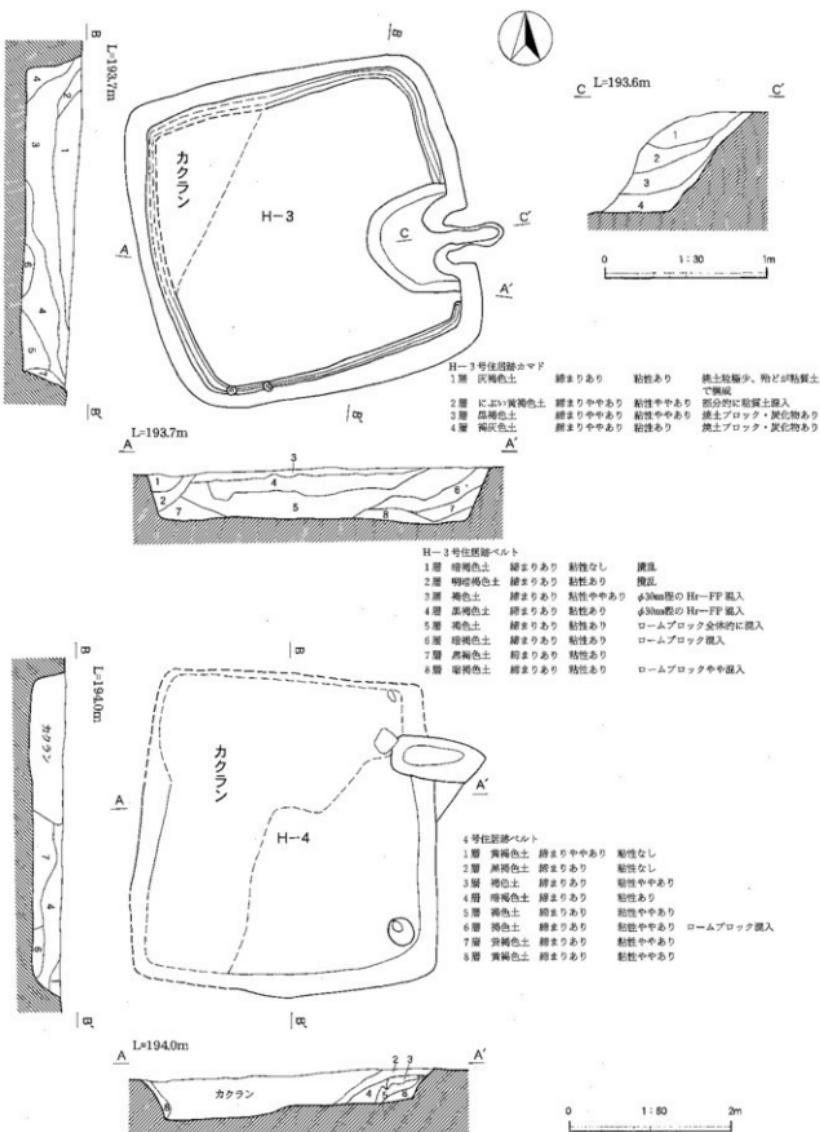


Fig. 7 H-3・4号住居跡

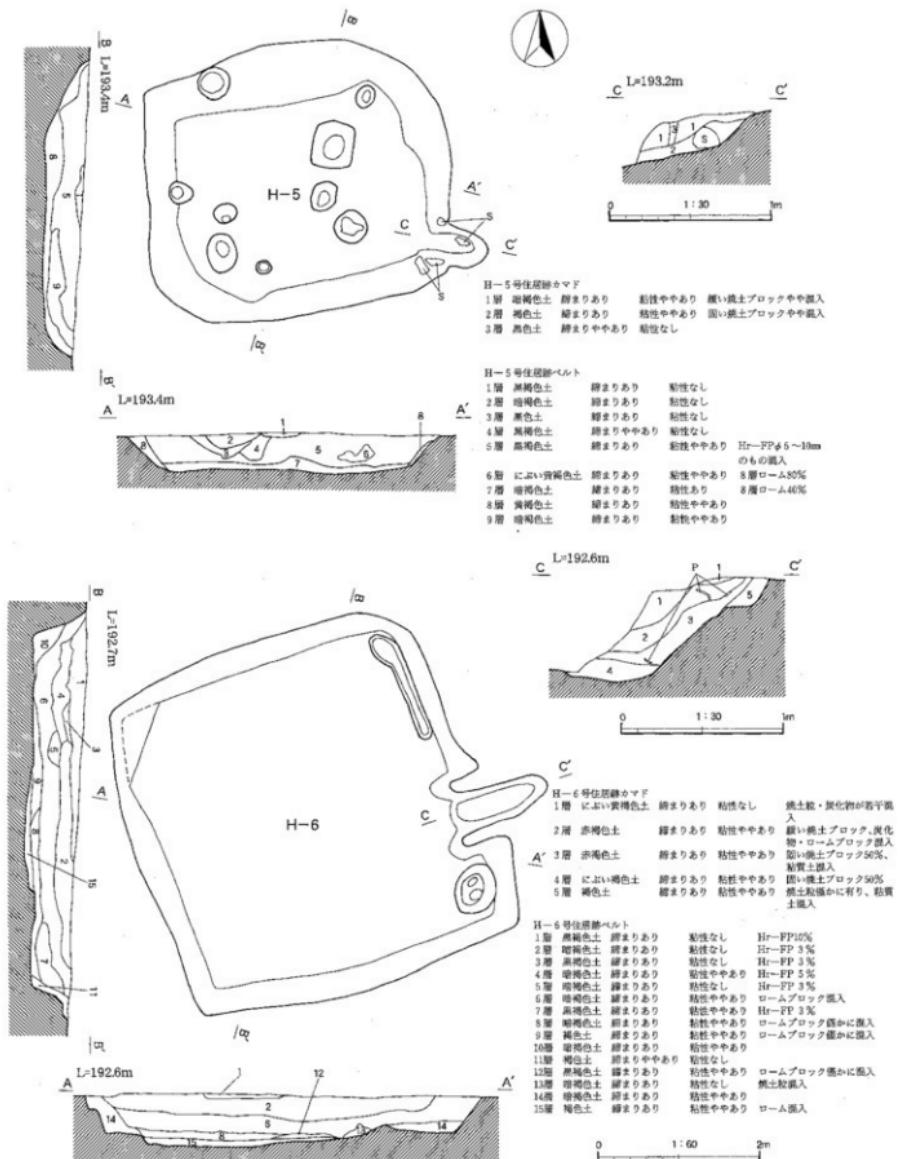


Fig. 8 H-5・6号住居跡

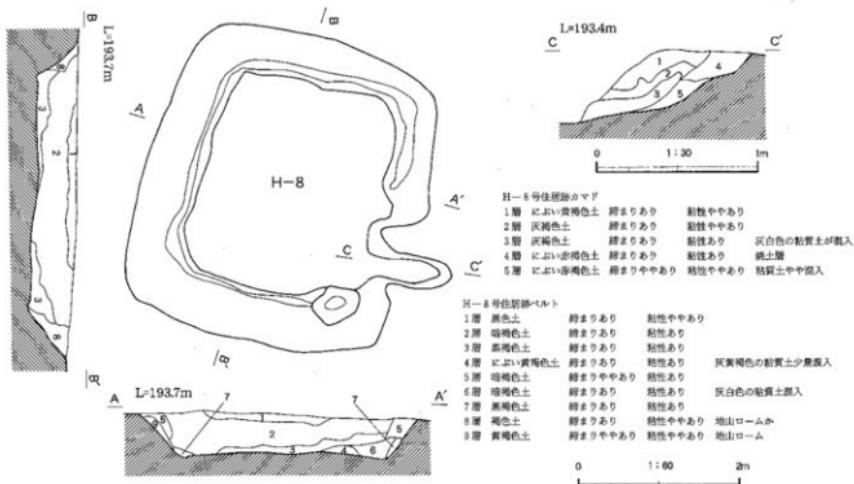
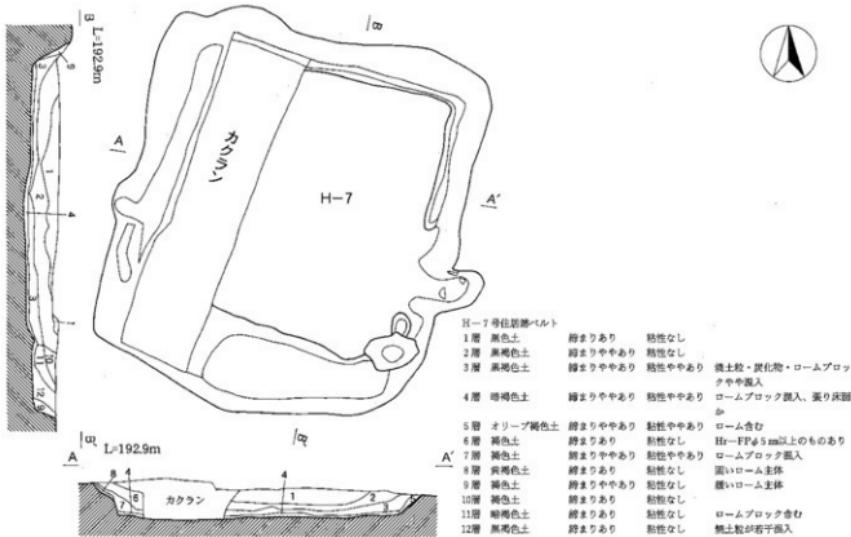
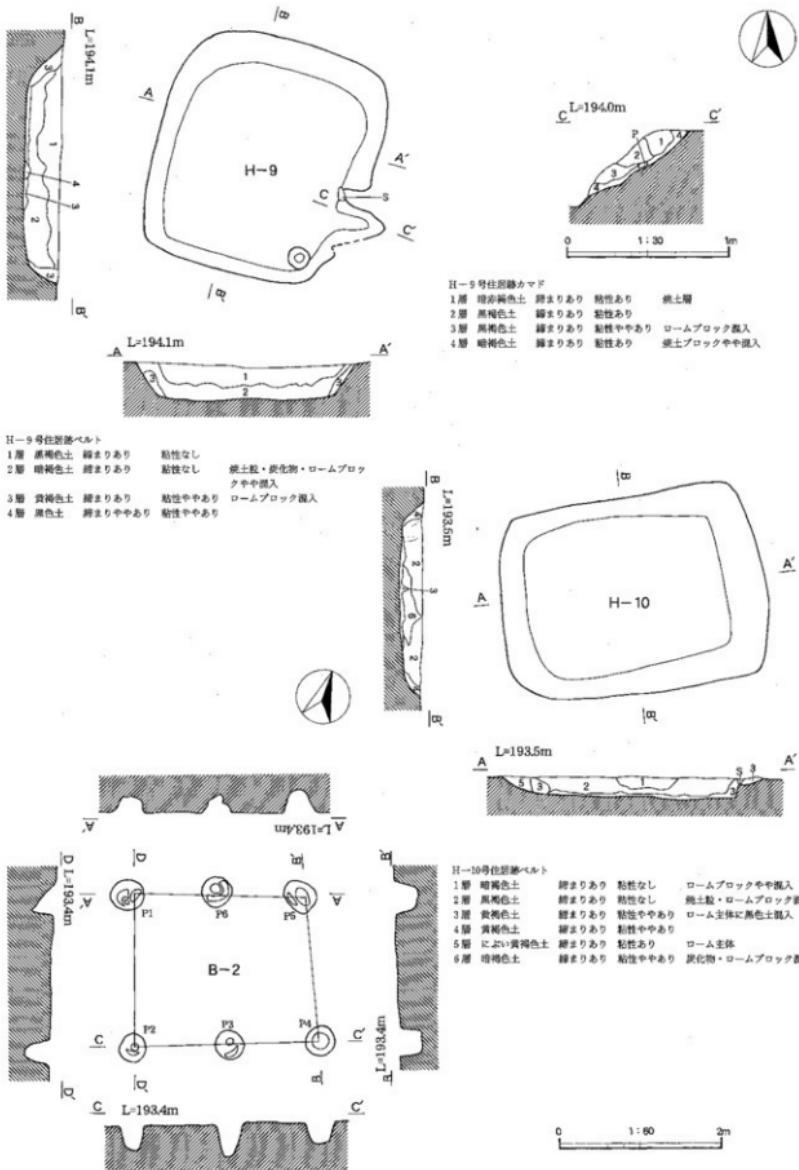


Fig. 9 H-7·8号住居跡



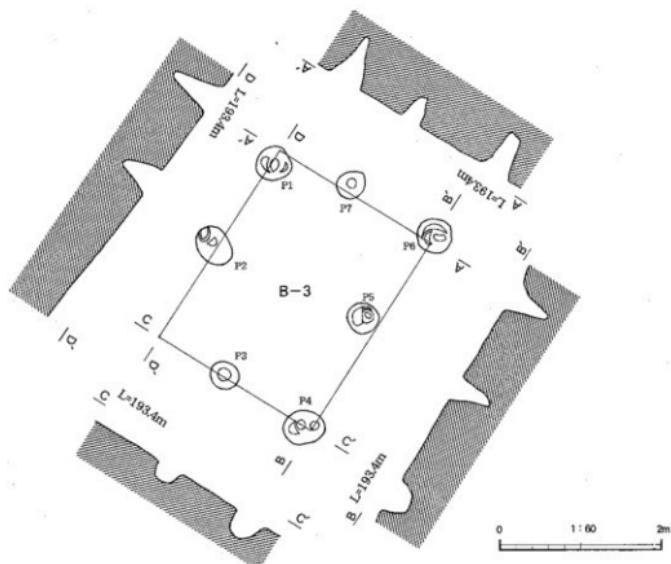
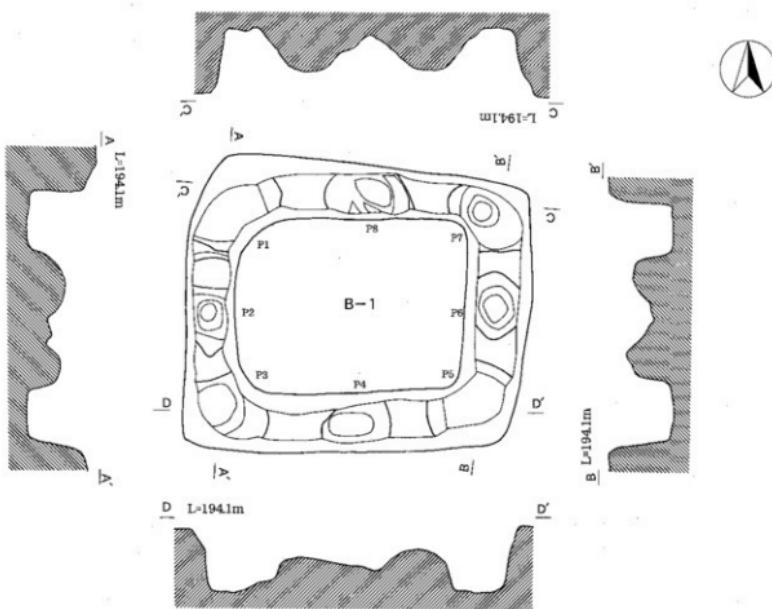


Fig.11 B-1・3号掘立柱建物跡

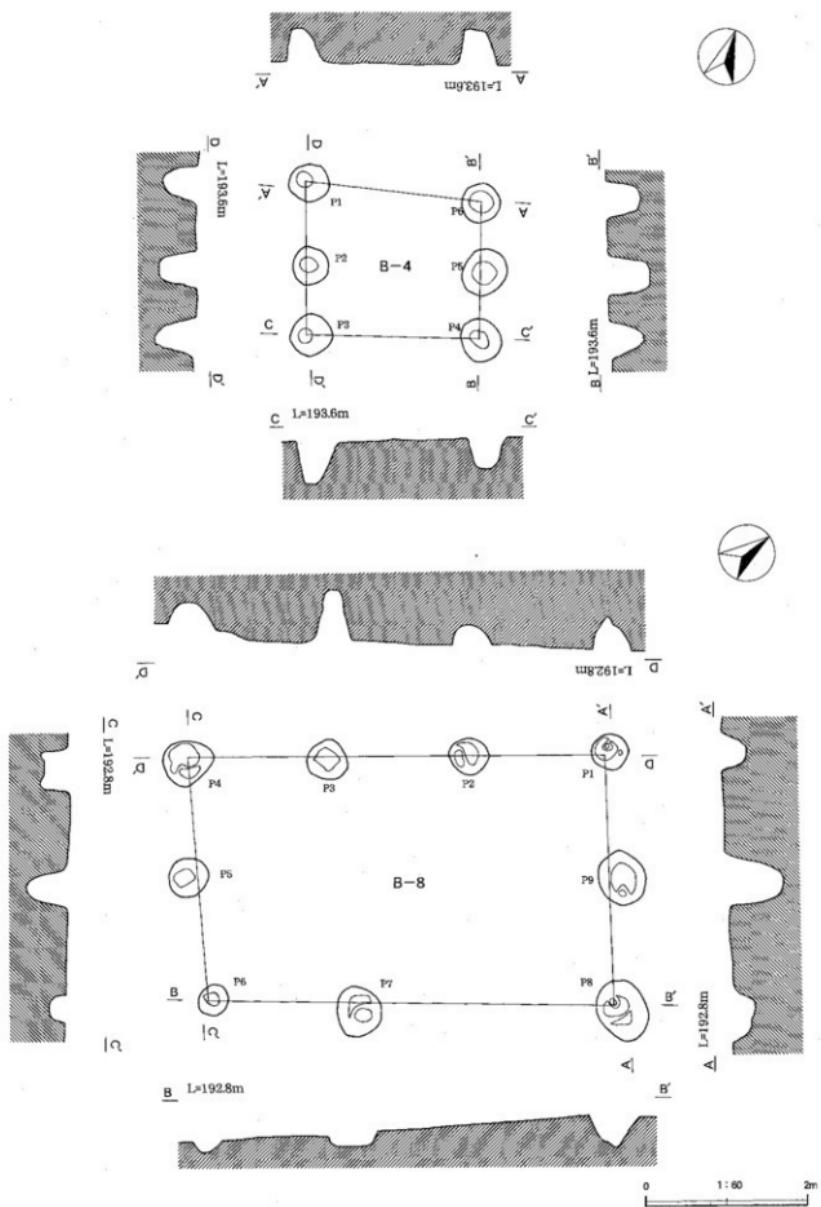


Fig.12 B-4 • 8号掘立柱建物跡

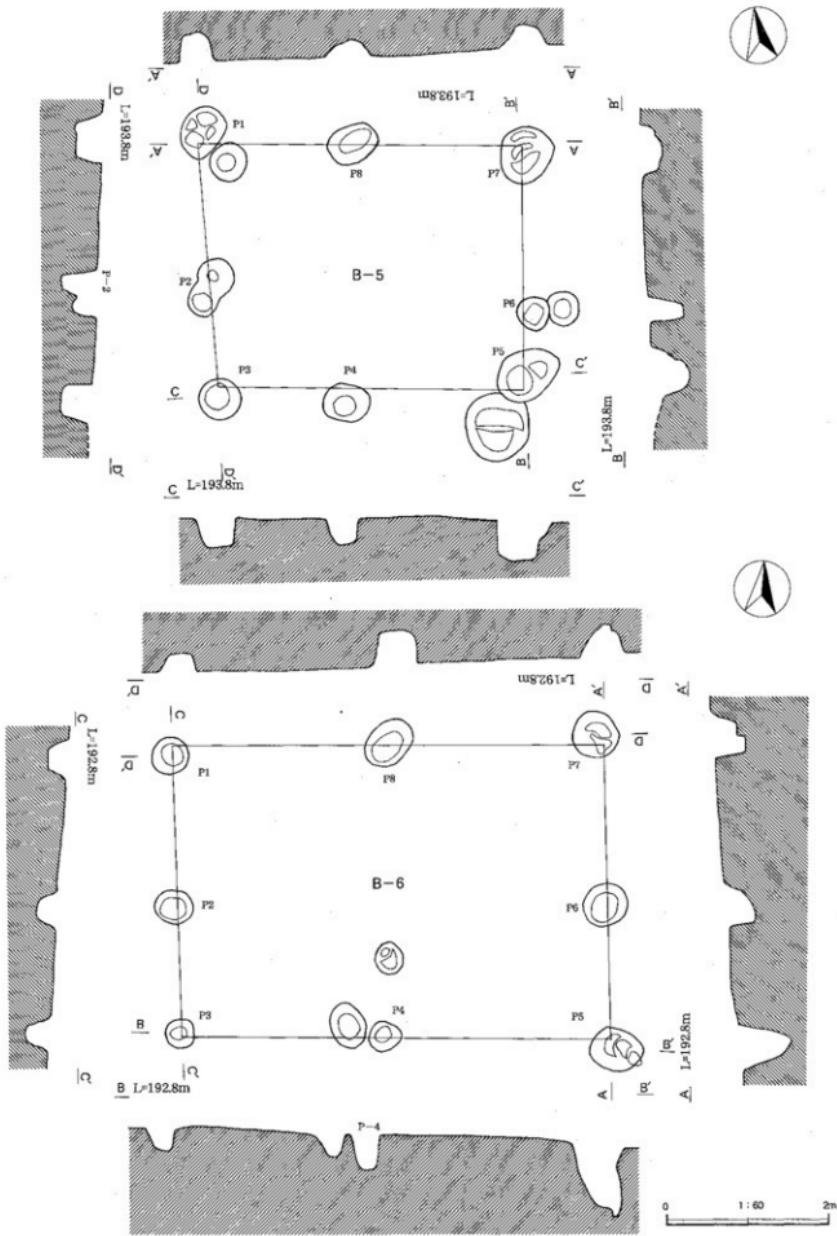


Fig.13 B-5 • 6号掘立柱建物跡

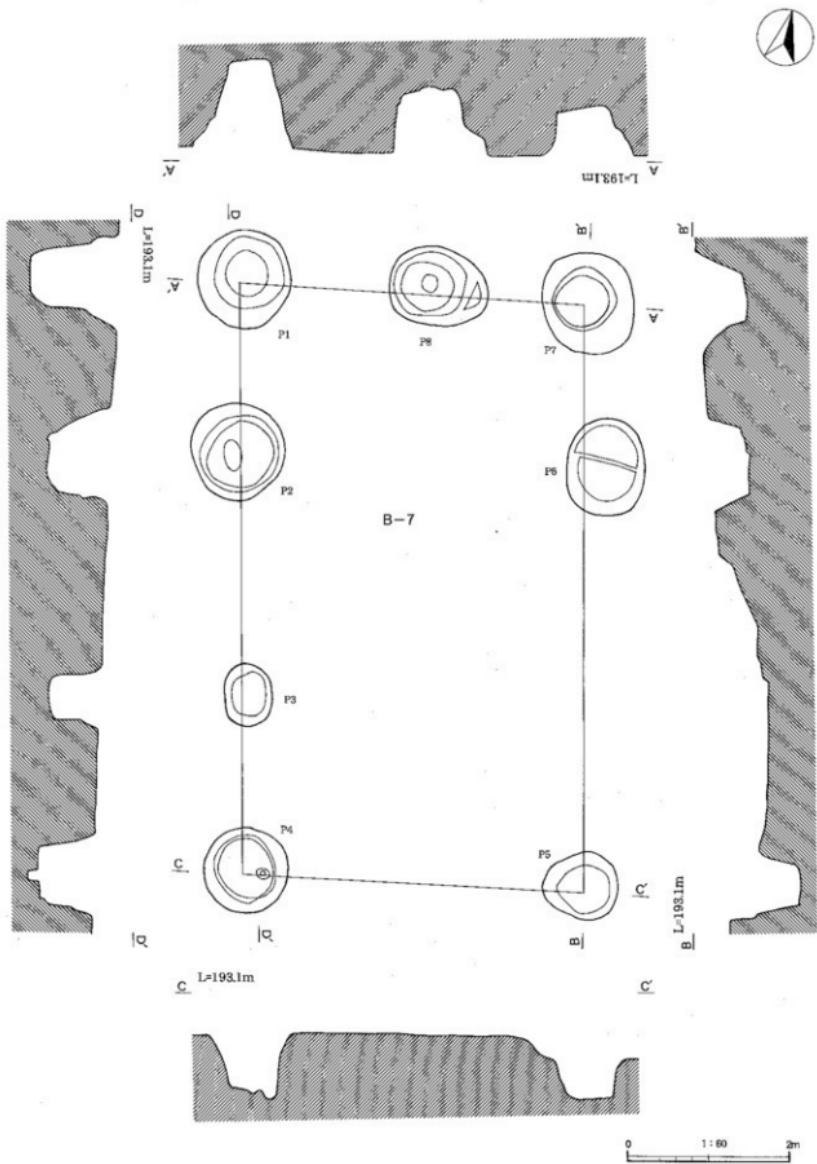


Fig.14 B-7号掘立柱建物跡

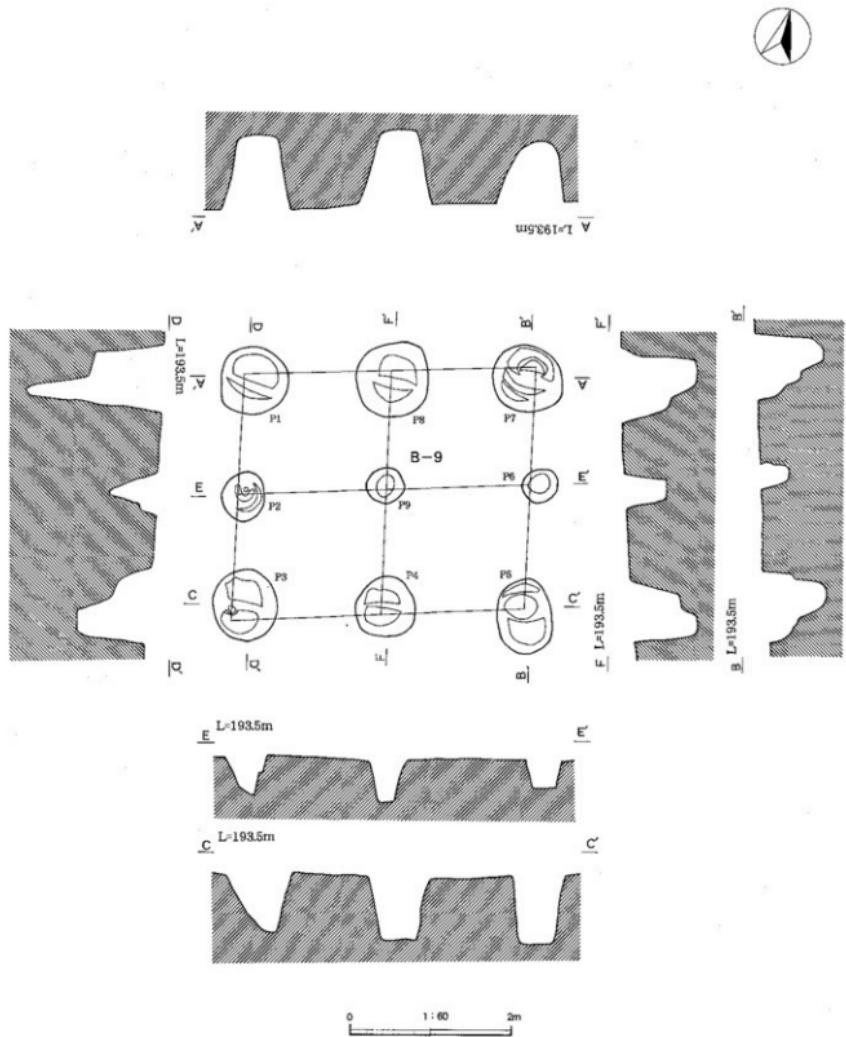


Fig.15 B—9号掘立柱建物跡

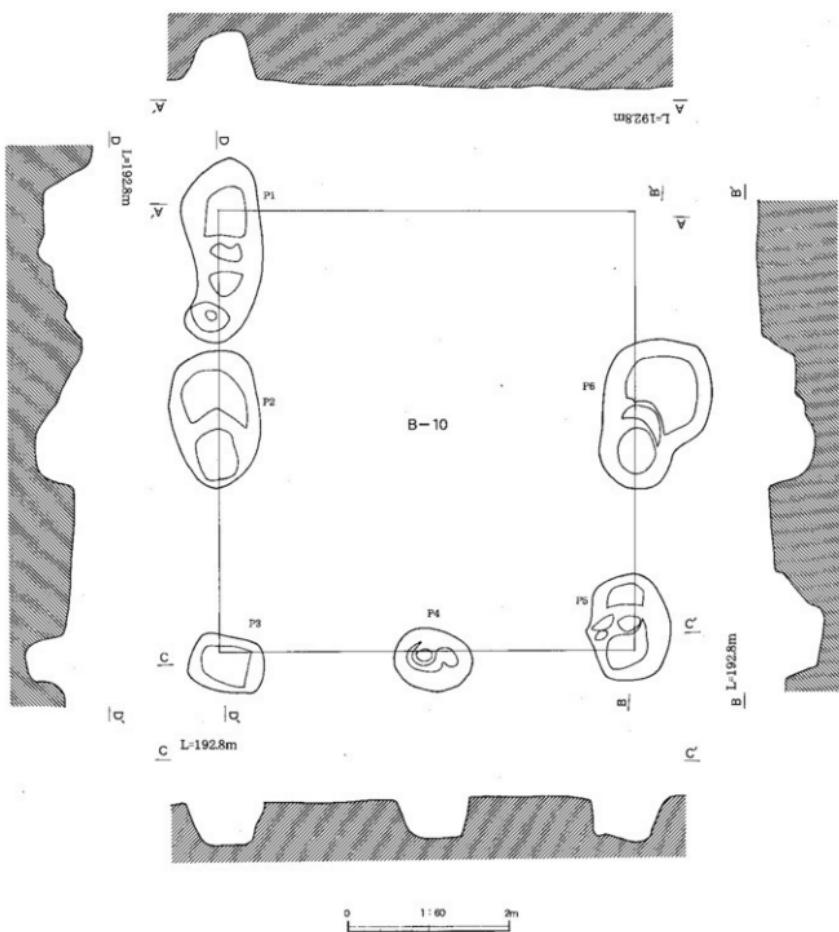


Fig.16 B-10号据立柱建物跡

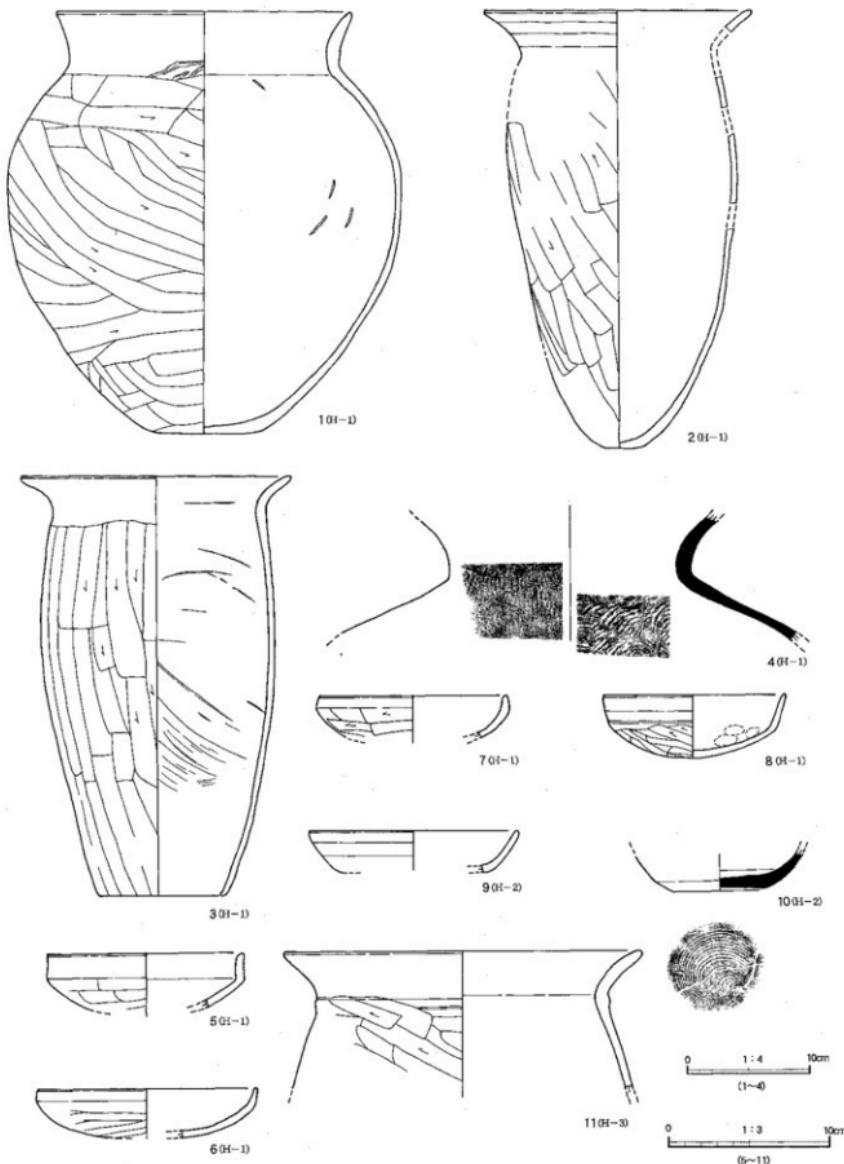


Fig.17 H-1~3号住居跡出土遺物

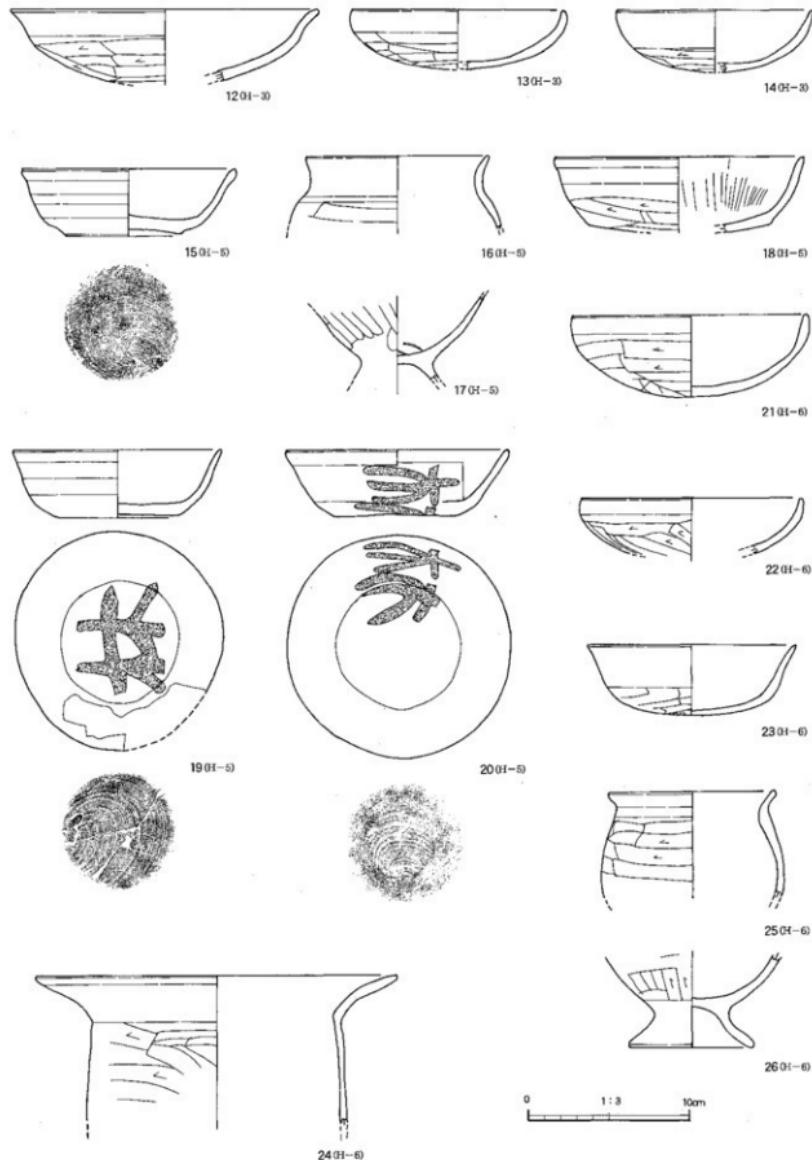


Fig.18 H-3・5・6号住居跡出土遺物

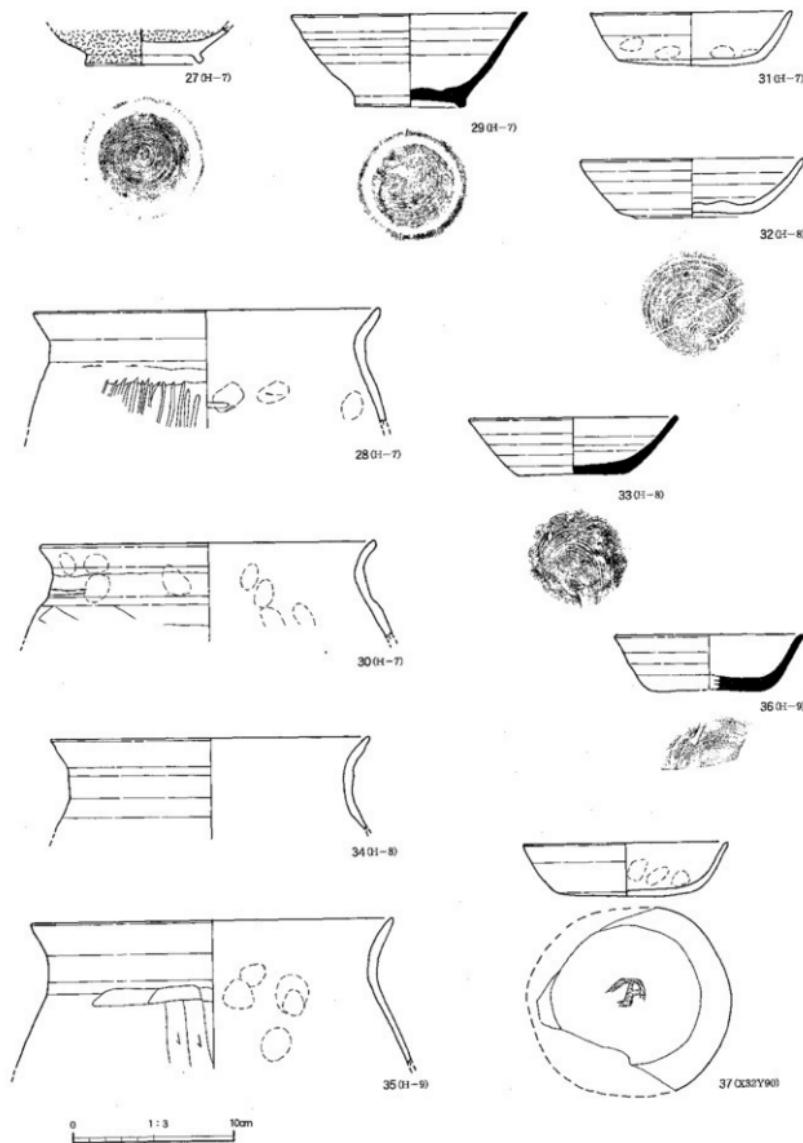
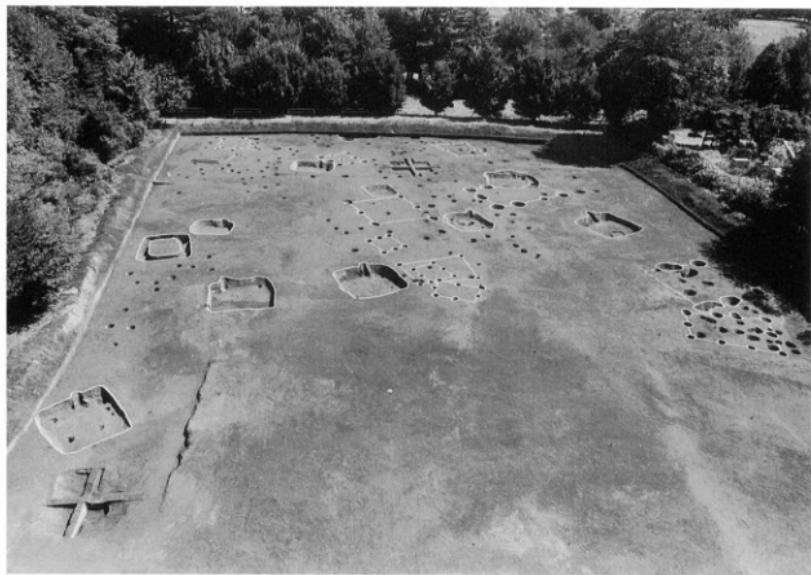


Fig.19 H-7～9号住居跡出土遺物、グリッド出土遺物



获庄跡跡遺跡調査区全景（西から）



H-1 全景（南西から）



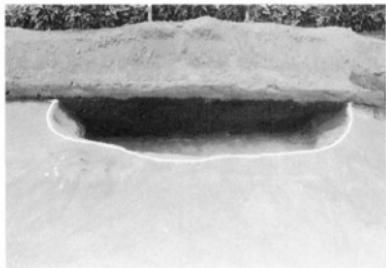
H-1 貯蔵穴出土遺物



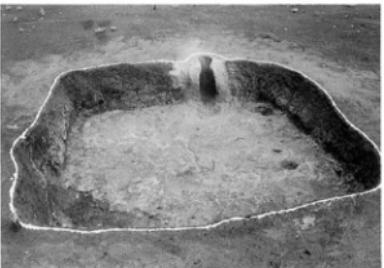
H-1 カマド内出土遺物（南から）



H-1 カマド内出土遺物（西から）



H-2 全景（西から）



H-3 全景（西から）



H-4 全景（西から）



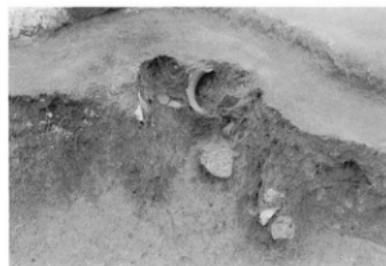
H-5 全景（西から）



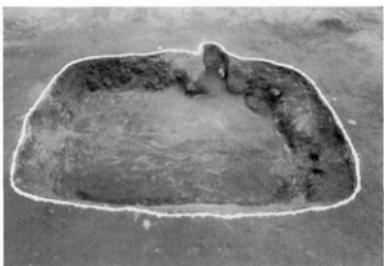
H-6 全景（西から）



H-7 全景（西から）



H-7 カマド内出土遺物



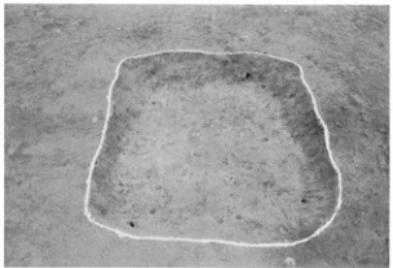
H-8 全景（西から）



H-8 遺物出土状況



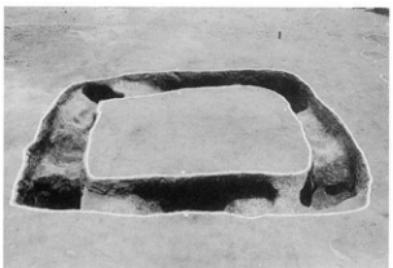
H-9 全景(西から)



H-10 全景(西から)



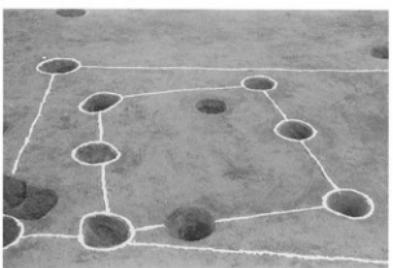
作業風景



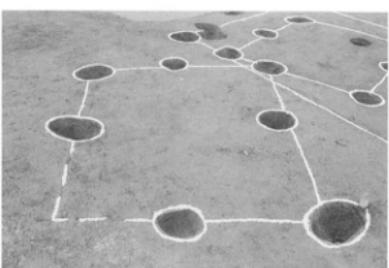
B-1 全景(北から)



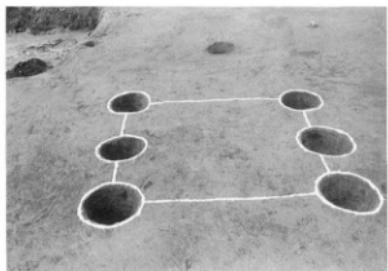
B-1 全景(南から)



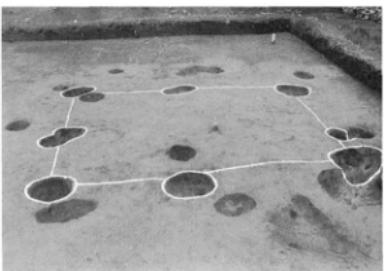
B-2 全景(南西から)



B-3 全景(南から)



B-4 全景(南から)



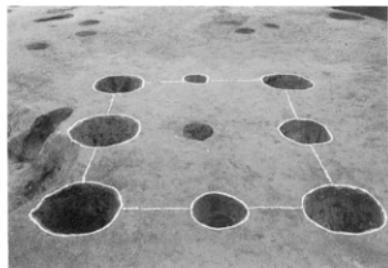
B-5 全景(西から)



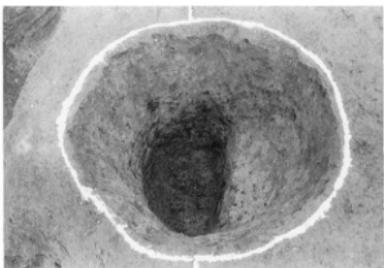
B-6 全景(北から)



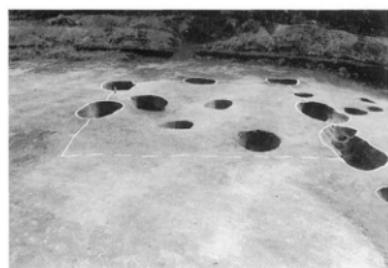
B-7 全景(東から)



B-9 全景(西から)



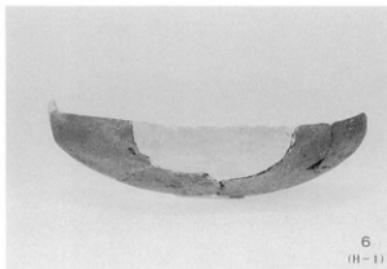
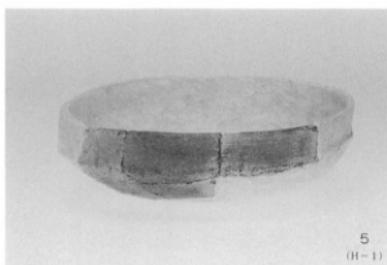
B-9 柱穴完掘状況

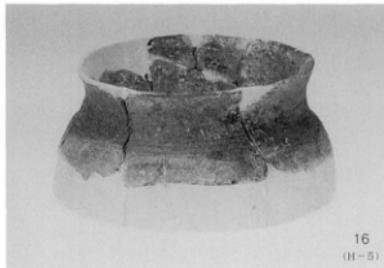


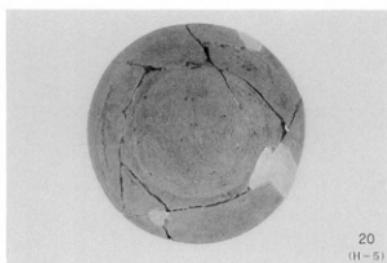
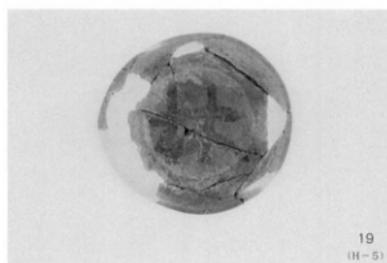
B-10 全景(北から)



获庭跡遺跡基本土層









25  
(H - 6)



27  
(H - 7)



26  
(H - 6)



29  
(H - 7)



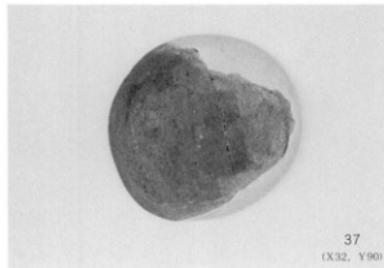
31  
(H - 7)



32  
(H - 8)



33  
(H - 8)



37  
(X32, Y90)

# 荻窪東爪遺跡

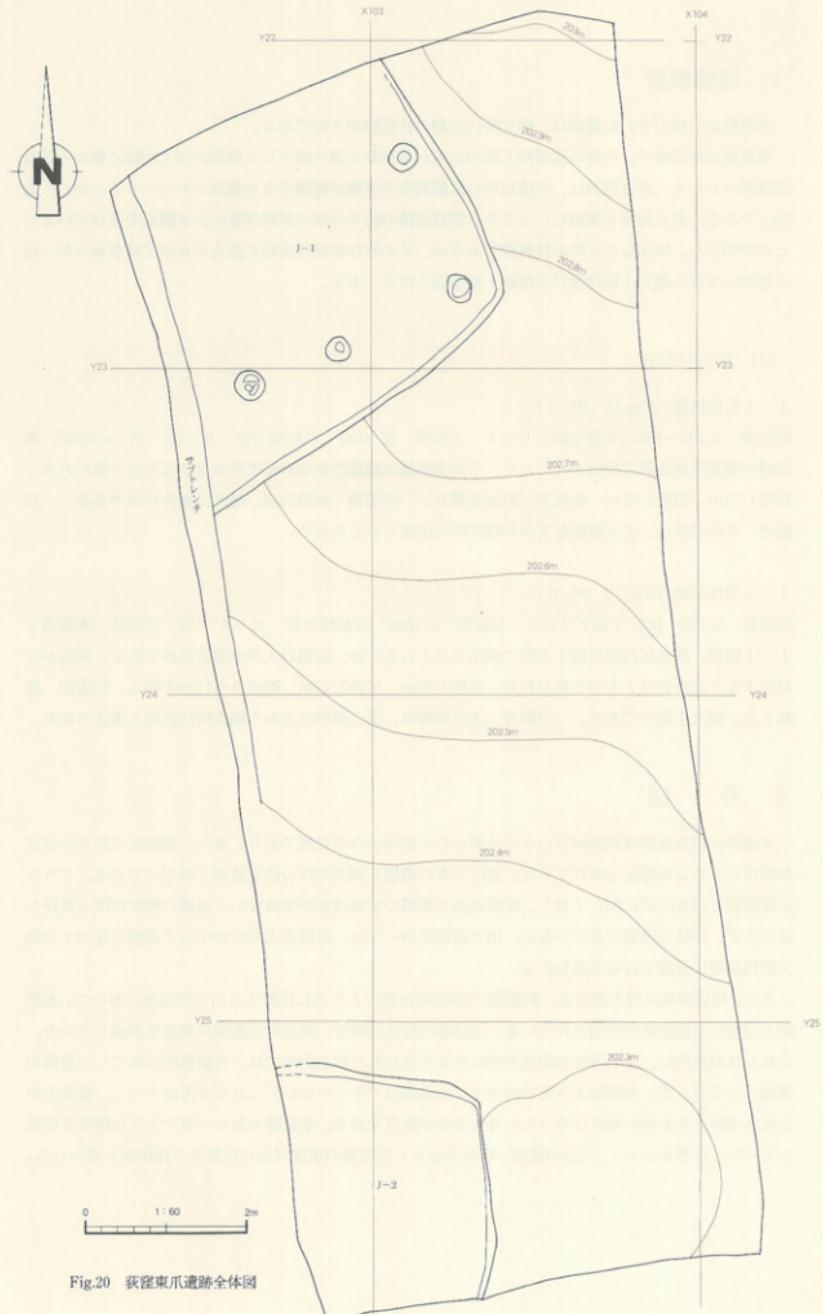


Fig.20 萩窪東爪遺跡全体図

## 1 遺構概要

本遺跡から検出された遺構は、縄文時代前期の住居跡が2軒である。

調査地は畑作地で、市営荻窪清掃工場の北東から東側を通り南下して県道渋川大胡線に繋がる新設道路部分である。調査面積は、平成12年の試掘調査で遺構が確認できた部分のみということから、約90m<sup>2</sup>である。表土掘削を実施したところ、調査面積の約半分ほどが耕作等による擾乱を受けていることが判明した。検出した2軒の住居跡であるが、その残存状況は良好と言えるものではなかった。出土遺物は少なく縄文土器片及び土器・須恵器片のみである。

### (1) 橫穴住居跡

J-1号住居跡 (Fig.21 PL.9)

◎位置 X102~103、Y22~23グリッド ◎面積 16.40m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-25°-W ◎形状 本遺構が調査区北西隅で検出されており、その全体像は確認できないが方形を呈するものと思われる。長軸4.21m 短軸3.97m 壁高8~37cmを測る。 ◎遺物 総数34点。縄文土器片のみである。 ◎備考 本住居跡は、出土遺物などから縄文時代前期と考えられる。

J-2号住居跡 (Fig.21 PL.9)

◎位置 X102~103、Y25グリッド ◎面積 6.75m<sup>2</sup> ◎長軸方位 N-6°-W ◎形状 本遺構もJ-1同様、調査区西壁に接する形で検出されているため、遺構の大半が調査区外である。現状から想定すると方形を呈するものと思われる。長軸2.82m 短軸2.42m 壁高9~19cmを測る。 ◎遺物 総数2点。縄文土器片である。 ◎備考 本住居跡は、出土遺物などから縄文時代前期と考えられる。

## 2 考 察

本遺跡の調査面積は約90m<sup>2</sup>というごく限られた部分のみの発掘であり、また、調査区の約半分ほどが耕作などによる擾乱を受けていた。検出できた遺構も縄文時代の住居跡が2軒だけである。どちらの住居跡も調査区壁に面しており、部分発掘で遺構の全容は定かではない。遺構の残存状況も良好とは言えず、炉址も確認できていない。出土遺物については、黒浜式土器片が中心で遺構の年代では縄文時代前期に分類されると思われる。

また、周辺地域に目を遣ると、本遺跡の西約500m程のところに位置する川白田遺跡において、本遺跡と同時代の住居跡が検出されている。住居跡の数は22軒で、縄文時代前期の集落を形成している。これとは対照的に、本遺跡の本調査実施に先立ち行われた試掘調査では、当該箇所のみでしか遺構が確認されておらず、本遺跡より東では全くその確認はできていない。これらを考慮すると、集落の中心は本遺跡よりも西の地区にあったと考えるのが妥当である。本遺跡を含む一帯で大きな集落を形成していたとは考えにくく、川白田遺跡一帯を中心とした集落の東端付近に位置する住居跡と思われる。

Tab.14 荻窪東爪遺跡土器観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ		胎 土	焼 成	色 調	残 存	縁形の特徴・成形・調整技法	備 考	Fig
			口 径	壁 高							
1	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい赤褐色	口 縁 部	羽状縞文	黒浜式	22
2	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい褐	口 縁 部	斜縞文	黒浜式	22
3	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい褐	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
4	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい赤褐色	肩 部	羽状縞文	黒浜式	22
5	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい褐	破 片	斜縞文	黒浜式	22
6	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	橙	破 片	斜縞文	黒浜式カ	22
7	J-1	深鉢	—	—	細粒	良 好	橙	肩 部	羽状縞文	黒浜式	22
8	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	黑	破 片	多截竹管による沈縞文	堀之内式カ	22
9	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	黒褐色	破 片	斜縞文		22
10	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	褐灰	破 片	斜縞文		22
11	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	灰黄褐色	破 片	羽状縞文		22
12	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい橙	破 片	平行沈縞文	堀之内式カ	22
13	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい黄橙	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
14	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	橙	破 片	斜縞文	黒浜式	22
15	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい赤褐色	破 片	斜縞文	黒浜式	22
16	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい褐	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
17	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい褐	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
18	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	にぶい黄橙	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
19	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	橙	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
20	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	明赤褐色	破 片	羽状縞文	黒浜式	22
21	表探	深鉢	—	—	中粒	良 好	にぶい褐	破 片	斜縞文	黒浜式	22
22	表探	深鉢	—	—	細粒	良 好	橙	破 片	斜縞文	黒浜式	22

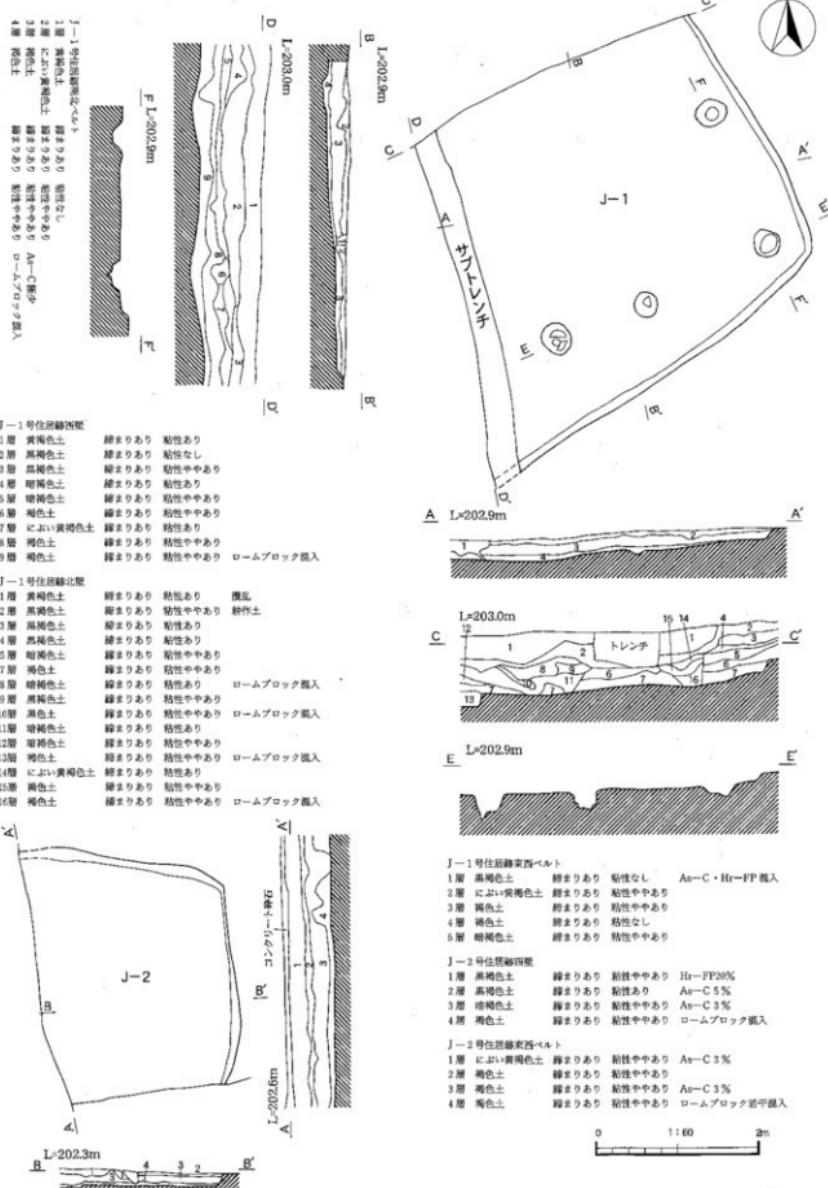
注) 表の記載は、以下の基準で行った。

① 胎土は、粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な質物が入る場合には質物名を記載した。

② 焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③ 色調は、土器外側で観察し、色名は「新規標準土色貼」に記した。

④ 大きさの単位はcmであり、現存値を( )、復元値を〔 〕で示した。



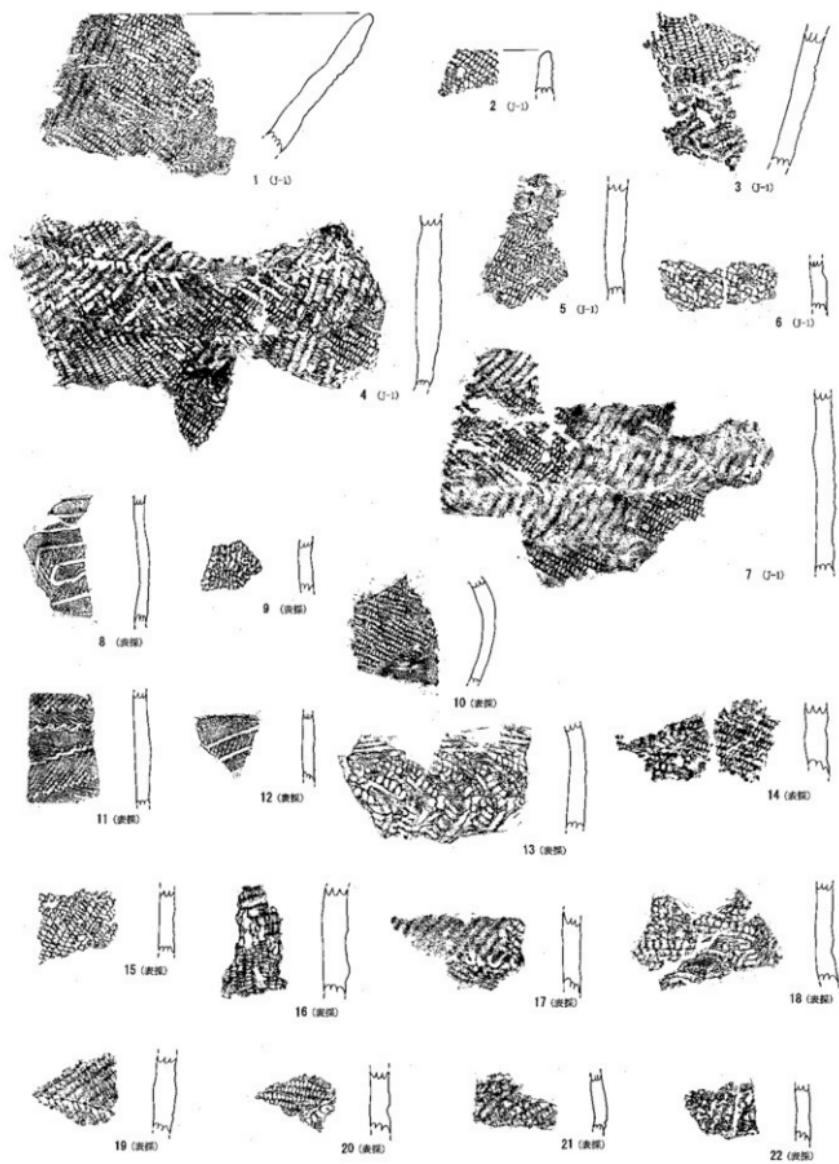


Fig.22 J-1号住居跡出土遺物、表探出土遺物



荻窪東爪遺跡調査区全景（北から）



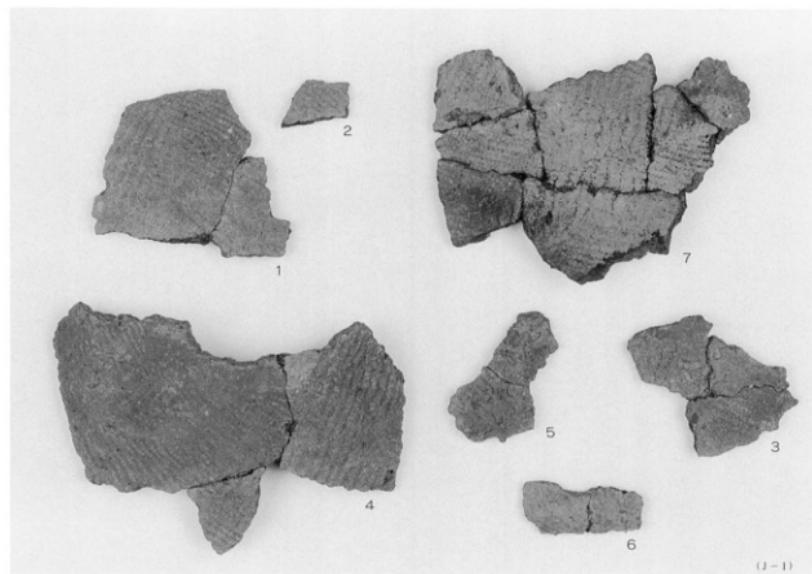
J-1 全景（東から）



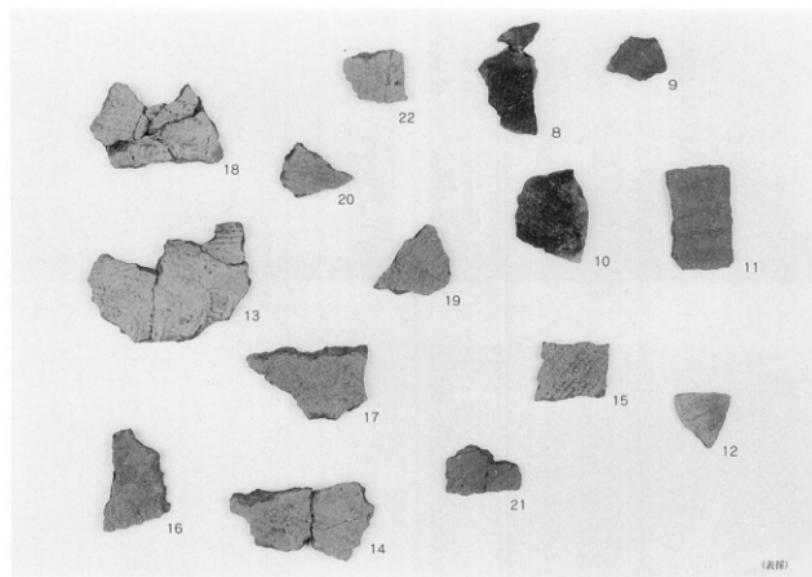
J-2 全景（東から）



荻窪東爪遺跡基本上層



(J-1)



(表10)

## 引用参考文献

- ・群馬県編刊『群馬県史叢名勝天然紀念物調査報告書第5輯「上毛古墳観察」』1938年3月
- ・勢多郡編纂委員会編刊『勢多郡誌』1958年3月
- ・前橋市史編さん委員会編『前橋市史』第1巻 前橋市 1971年2月
- ・田辺昭三編『海磁大系4「須恵」』平凡社 1975年10月
- ・大胡町誌編纂委員会編『大胡町誌』大胡町役場 1976年6月
- ・井上唯雄『群馬県下の歴史時代の土器』『群馬県史研究』第8号 群馬県史編さん委員会 1978年9月
- ・群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編3 群馬県 1982年3月
- ・中澤充裕・杉浦つや子編『槍形遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会・佐田建設 1982年3月
- ・前原照子編『小神明遺跡群』前橋市教育委員会 1983年3月
- ・井野修二編『小神明遺跡群』II 前橋市教育委員会 1983年3月
- ・大木誠一郎編『小角田前遺跡』御群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年3月
- ・中澤充裕・唐澤保之編『芳賀園地遺跡群』第1巻 前橋市教育委員会 1984年3月
- ・前橋市教育委員会編刊『小神明遺跡群』IV 1986年3月
- ・桑原昭・神保一美編『小神明遺跡群』V 前橋市教育委員会 1987年3月
- ・桜岡正信『土器の分類と時期設定』『国分寺・尼寺中間地域』(2) 御群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年3月
- ・桜岡正信『足高高台を有する土器について』『国分寺・尼寺中間地域』(2) 御群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年3月
- ・林喜久夫・前原照子・井野誠一編『芳賀園地遺跡群』第2巻 前橋市教育委員会 1988年3月
- ・新井仁『群馬県における奈良・平安時代の集落について—掘立柱柱建物を中心として—』『群馬の考古学』御群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年11月
- ・井野誠一編『芳賀園地遺跡群』第3巻 前橋市教育委員会 1990年3月
- ・木津博明・桜岡正信編『国分寺・尼寺中間地域』(4) 御群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990年3月
- ・スナガ環境測定編『芳賀北曲輪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990年3月
- ・井野誠一編『芳賀園地遺跡群』第4巻 前橋市教育委員会 1991年3月
- ・鈴木雅浩・狩野吉弘編『芳賀北原遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991年3月
- ・益間季志『掘立柱柱建物の機能と構造—埼玉・群馬県の集落遺跡の例を中心として—』『研究紀要』第9号 御崎玉県埋蔵文化財調査事業団 1992年10月
- ・井野誠一編『芳賀園地遺跡群』第5巻 前橋市教育委員会 1994年3月
- ・小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』日本色研事業 1995年1月
- ・スナガ環境測定編『小坂子油田I・II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997年3月
- ・坂口好孝・眞塙明雄編『鳥取福寺遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998年3月
- ・山武考古学研究所編『川白田遺跡』川白田遺跡調査会 1998年3月
- ・林信也・福田貢之編『鳥取福寺遺跡』II 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999年3月
- ・齋木一敏・須藤友子編『五代江戸屋敷遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001年3月

## 抄 錄

フリガナ	オギクボイワシヅカイセキ・オギクボヒガシヅメイセキ
書名	荻窪跡遺跡・荻窪東爪遺跡
副書名	荻窪地区開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小峰 篤 横澤 真一
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2002年3月22日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北 緯	東 綏			
荻窪跡遺跡	前橋市荻窪町 437-11	10201	13D17	36°25'15"	139°07'55"	20010517	2,910m <sup>2</sup>	荻窪地区 開発整備 事業
荻窪東爪遺跡	前橋市荻窪町 661-1	10201	13D18	36°25'24"	139°08'06"	20010928	90m <sup>2</sup>	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物
荻窪跡遺跡	集落跡	奈良・平安時代	住居跡	10軒	土器(壺、甕、瓶)
			掘立柱建物跡	10棟	須恵器(甕、壺、塙)
特記事項	1号掘立柱建物跡は布堀りを持つ。				
荻窪東爪遺跡	集落跡	縄文時代前期	住居跡	2軒	縄文土器片(黒浜式)
特記事項	特になし				

---

## 荻窪鰯塚遺跡・荻窪東爪遺跡

---

平成14年3月18日 印刷  
平成14年3月22日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市三俣町二丁目10-2  
Tel 027-231-9531

印刷 朝日印刷工業株式会社

---